

そして????になった転
生者

にわかネット文化ファン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マギレコに転生した男が前世の文化を持ち込む物語です。

(匿名設定では) 初投稿です。

ここで例の名前ぐらい出しても・・・バレへんやろ。

目次

誓いを思い出せ!	1
監督「なんだこれは・・・たまげたなあ」	6
誓いを忘れ、幸福に満ちていた日々	13
過去に付き合ってた子、略して『かこ』	21
オルガ・イツカ「だから唯華は文学をやめた」	32
浸透していく文化	41
アンタはここでふゆうと舞うのよ	47
世界のYuica!?	52
＜突然のバトル展開＞	60
瀬宮、敗北	71
初めての弟子?	83
ぼんやりとした不安	91
星の舞	97
華の心	101
いろは、襲来	109
這いよる暗闇	115

誓いを思い出せ！

「それはそうと、お前は破門だ。二度と華心流に入るな」

誰かに自分をはつきりと否定された最初の瞬間。

「唯華くんの占いは形式的すぎるです」

これはまだマシだった。

「才能のある奴にはわからないですよー」

「本当は俺たちのこと見下してるってはつきり言えよ」

「消えて」

まさか、転生特典のせいでクラスメイトたちに暴言を吐かれるとは思わなかった。

「貴様には失望した！散れ！」

その後、大事な友人からそんなことを言われてしまった。

「君の絵はまさにルネサンスの再来と言っていい。でも、それだけだ」

「・・・所詮、フラワーボーイの絵は教科書に過ぎないんだよね。ツマラナイ」

叫びたかった。でも、そんなこと一度もしたことがなかったから。

ただ、舞い続けた。肺が焼けそうな感じがする。

前世のとある人気漫画に出てきた神楽をただ舞い続ける。

北養区の人気のない電波望遠鏡の敷地に忍び込んで、練習していた。

一度だけ、動画サイトに自らの舞を投稿したことがある。

結果は華々しいものであった。

「コイツは何者だ!?!」

「なんて美しい神楽なんだ!」

「こんなの常人にはできないよ!」

ヒノカミ神楽は確かに常人にはできない芸当だ。

動画サイト以外では、里見メデイカルセンターで舞ったことぐらいか。

あの時も、動画サイトと同じように褒められた。

でも、十七歳になった現在、相変わらず褒められることはあるが、怖くなった。

また何か言われるのかと思うと、やる気が湧かなくなるのだ。

「・・・もうやってられっか」

彼は神楽鈴を放り投げる。

その瞬間、なぜか突然現れた少女にビンタされた。

「諦めるなっす!今、すっごく上手かったのに、どうしてそこでやめるっすか!」

「えっ・・・誰?」

「ひかるが何者か、そんなのはどうでもいいっす！

どうしてそこでやめるっすか！それだけを聞きたいっす！」

名前言ってるじゃねえか、というツツコミは控えることにした。

「・・・意味を見出せないからだよ。俺の全ての芸術行為とやらにな。

昔は褒められたのに、今では破門だの消えてだの散れだの上手いだけだのつまらないだの・・・。

形式的って言われた方がまだマシだったよ・・・」

「そ、それは確かにきついっすね・・・。でも、それで本当にいいっすか!?

そもそも、アンタが躍ってるのは、褒められるためだけっすか!?

アンタは・・・他人に尺度を計ってもらわないといけないっすか？

いったい、何がアンタの望みっすか・・・?」

その言葉に、転生者は、聖道唯華は、はっとさせられた。

そうだ、褒められるのを第一の目的としてこんなことをしていたのではない!

十七年前、自分が慈悲深い神の前で何を誓ったのか思い出せ!

「・・・そうだ、思い出したぞ!俺は何を望んで生まれてきたのか!」

「それは一体何っすか!」

「それは秘密だ!でも、ありがとう、ひかる!」

「どういたしましてっす!とところで、どうしてひかるの名前を・・・あつ」

唯華は神楽鈴を拾い上げて、改めてヒノカミ神楽を舞おうとした。

「あつ、今からここはひかるたちが使うので家でやってほしいっす」

「わかった」

猛スピードで家に帰りながら、彼は自分の誓いを思い出していた。

マギレコ世界で文化侵略

神楽、華道、絵画、ピアノ、パンフルート・・・。

そういったものをマスターできたのも、誓いの効力のおかげだ。

でも、それらは目的達成のための手段に過ぎない。

彼はひかるに深く感謝した。

「・・・すごい才能の塊の男だったわね。」

とところで、どうして力づくで追い出さなかったのかしら?」

「・・・アイツの瞳、少し前のひかるに似ていたっす。」

だから、どうしても放っておけなくて・・・」

「そういうことね」

「でも、舞わせてもよかったんじゃないの?」

笠音ア才は不満だった。なにしろ、あのヒノカミ神楽を生で見れたからだ。

「何言ってるんだ、アオ。ここは戦場になるんだぞ。一般人は邪魔なだけだ。

・・・アレが一般人とも思えないけどな」

大庭樹里は唯華の動きが常人には真似できないことを見抜いていた。

「・・・まさか、本人じゃねえよな？」

ヒノカミ神楽の動画を投稿した者の正体は現在でもネットで考察が続いているくらいだ。

第二部がまさに始まろうとしていたが、唯華はそれに気づいていなかった。

正確に言えば・・・第二部の存在自体忘れていた。十七年も生きていけば、そうなる。なにしろ、誓いさえも忘れてしまっていたくらいだから。

監督「なんだこれは・・・たまげたなあ」

最初に無があつた。そして、光が生まれ、ホモビが再生された。ホモビが再生され終わると、そこはいつもの天井だった。

唯華はオリジナルのホモビを夢の中で創り上げてしまったのだ。

さて、例のホモビに関してはこのマギレコ世界にも存在する。

事実、それは天井裏に嚴重に保管されている。

あの野球選手は前世と違つて、出演がバレることもなく活躍していた。

しかし、そのサクセスストーリーも終わりを迎えるだろう。

唯華のするべきことは、ただガイドラインに投下することのみ。

今までは勇気が湧かなかつたが、今の彼は誓いを思い出していた。

ボタンは押された。この瞬間、多田野はTDNになった。(映像の世紀風)

さて、唯華の一日は早い。水名区に住んでるのに、通つてる学校は大東学園だからだ。

ちなみに、電車通学ではなく徒歩だ。もう一度言おう、徒歩だ。

ヒノカミ神楽を踊れるから、多少はね？

「あの才能に満ち溢れた子のことだ。大東学園に通うのも考えがあるのかもしれない」

そういうわけで、大東学園に通つていても特に怪しまれることはなかった。

実際、そこまで高尚な考えはなかった。ただ、今の神浜市の雰囲気には反抗しているだけだ。

「あつ、唯華お兄さん！今日も早いですね！」

「おはよう、理子。今日は唐揚げ弁当で」

工匠区ではお弁当を買つていく。

しかし、今日はお弁当だけではない。

久々に、あの工房に立ち寄った。

「おっさん、パンフルートのメンテ頼む。」

「ここ最近、使つていなかったからさ」

「・・・まだ朝だぞ」

「朝だからこそさ。帰りには終わつてるだろ？」

「そうだけどさ・・・ようやく眠れる獅子のお目覚めか」

そして、大東学園に到着。この時点でも、教室に一番乗りだった。

「さて・・・俳句でも詠みますか」

ぬばたまの黝き月か吼ゆるとき

別に俳句はこの世界にもあるのだが、無性に何かをしたい気分だった。

「情景に合ったものを詠まんか！馬鹿者！」

「ひでぶ!？」

唯華は腹を蹴られ、吹っ飛ばされ、黒板に叩きつけられた。

「この清々しい朝の教室のどこに黝き月があつた!?言つてみる！」

「し、仕方ねえだろ・・・詠みたくなつたんだからよ。・・・ガハツ」

「出直せ」

その後、一日は平穩に過ぎていった。

・・・周りから無視されている状況を平穩というかどうかは人それぞれだが。

ある一件で、クラスにおける評判は完全に地に堕ちていた。

もし、多田野をTDNにした件がバレたら、今度は奈落に堕ちるだろう。

放課後、彼は部活に入っていなかった。入れてもらえなかったのだ。

「どうせアイツの独壇場になる」

文化部でもそんな扱いで、運動部でも・・・。

「サッカーは団体競技だ。個人競技じゃない。帰れ」

「野球も団体競技だ」

「バスケも団体競技だ」

「卓球も誰が何と言おうと、団体競技だ。」

だから、絶対に入らないでください。お願いします」
そういうわけで、唯華は帰宅部に入るしかなかった。

帰り道に、また弁当屋に立ち寄った。

「理子、美味しかったよ」

「ありがとうございます！それで、今夜は何を食べますか？」

「この野菜弁当を頼むよ」

そして、工房でパンフルートを回収する。

「……ところで、俺の工房で働かんか？」

「えっ、いいのか？」

「……やっぱやめだ。お前の独壇場になっちまうからな。」

悪い事は言わん、何かやるならお前ひとりでやった方がいい」

「食いはぐれないと思ったのに……」

「お前さんの技能だったら、簡単には食いはぐれないだろうに」

パンフルートを回収した後、ボロボロになった中央区を歩く。

ワルプルギス襲撃以前は活気があったのに、今では寂しくなっている。

ちなみに、興味本位でワルプルギスに挑んでみたが、かすり傷しか与えられなかった。

その時は動画投稿時と同じ格好で変装していたので、周りにバレることはなかった。

『ヒノカミが異常気象下の神戸市を神楽で救った』という都市伝説が生まれた。

ヒノカミというのは動画サイトでのチャンネル名のことだ。

廃墟になったビルを上がって、屋上でパンフルートを吹き始める。

曲は“テルーの唄”。非常に残念なことに、この世界には宮崎駿がいないのだ。同時に、嬉しいことにゲド戦記のアニメ版も作られなかったのだが。

ちようどタ方で、曲と情景が見事に一致している。

これも一つの立派な文化侵略。ジブリ文化はこの世界にはないのだから。

「・・・アンタ、唯華ちやうか？」

背後から突然、知らない褐色の女性に声を掛けられた。

「・・・そうですか」

「やっぱり。みたまから聞いたんや、この街にパンフルートの名手がいるって」

唯華は思い出した。リヴィア・メディオスだ。

「突然、真上から綺麗な音色が聞こえたから、そんな気がしたんや。」

最近、スランプになったっていうことを聞いたんやけど・・・」

「昨日ようやく立ち直ったというか・・・」

「そうみたいやな。それで、曲名はなんていうんや？」

唯華は返答に困った。テルーの唄はこの世界にないからだ。

「・・・T、まだ仮の名前しかないんですよ」

「アルファベット一文字かい。じゃあ、そのTとかいうのしばらく演奏してくれん？」
「お安い御用」

陽が完全に沈んだ後は、秘密の練習場に向かう。

そこは里見メデイカルセンターの近くにある野原。

なぜ街のど真ん中に野原があるのか気にしてはいけない。

月が黒い雲に隠されつつあった。

ぬばたまの黝き月か吼ゆるとき

なるほど、十七夜の言ったことはこのことだったのだ。

俳句は情景に合った時に詠まなくてはいけない。

そんなことを思いながら、ヒノカミ神楽の練習を始めた。

この神楽を始めたのは小学生の時ぐらい。その時は辛かった。

しかし、余計な動きや呼吸を省くことができるようになってからは違った。

月が完全に隠されて、さらに暗くなったが、彼が神楽を止めることはなかった。

ふと、彼はこんなことを思った。

ホモビに合わせて神楽を舞ったらウケるんじゃないのか？

練習を止めて、野菜弁当を食べる。

その際、スマホでニュースを確認した。

「当時は若くお金が必要でした」

可哀想だが、これも誓いのためだ。

誓いを忘れ、幸福に満ちていた日々

「……しつかりしてください、師匠」

「はは……すまん、唯華。」

私はもう駄目みたいだ」

「お父さん……」

「……ななか、一門を取り戻せ」

「……はい」

「唯華……いざという時はななかを頼む」

「……わかりました、師匠」

「それはそうと、お前は破門だ。二度と華心流に入るな」

「師匠??？」

あの日の夢を見た。なぜ、師匠はななかを頼むと言った直後に破門したのか？

その謎がどうにも頭の中でぐるぐるとしている。

結局、それ以来、華道に手を出すことはなかった。

思えば、ななかの父が病に伏せるまで、彼の人生は幸せだった。

だが、華心流が乱れ始めてから、彼の心は冷える一方だった。でも、もういいんだ。誓いを思い出したのだから。

それでも、やっぱり華道に手を出すのは恐怖を覚える。

また、あんなことになるのではないかと思うと・・・。

一旦、ネットの様子を確認する。ついに『野獣先輩』の考察が始まっていた。

淫夢文化はもともと寛容さゆえに、ネットに浸透しつつあった。

あの文化の最大の長所は乗っ取りだからだ。

「・・・よしよし、良い感じだ」

他のホモビも発掘されつつあるので、ここで第二の投下を開始した。

はつきり言って、それは普通のホモビよりもはるかに危険だ。

そもそも、マジレコ世界にも存在していること自体が不思議だった。

見ている者の精神を破壊しかねないような代物なのに。

なにしろ、出演者でさえも・・・

「ンンツ・・・マ。ツ！ア。ツ！ア。ツ！ア。」

と叫んでしまうくらいにホモビだからだ。

だが、もはや誓いに従って生きる唯華にためらいなどなかった。

たった数十分で、ネットの掲示板は阿鼻叫喚という状況になった。

少しの罪悪感を覚えながら、彼は出かけた。

街は心地よい日差しと風に包まれていた。復興が進んでないけど。

特に用事があるというわけではない。ただ、散歩したいだけなのだ。

こうしていると、ここが本当にゲームの世界なのか怪しくなってくる。

彼を暖かく照らす太陽も、彼を優しく包み込んでくれるそよ風も、現実^{Real}。

決して虚^{Fiction}構なんかじゃないと、断言できる。

自分はマギレコに生きているのではない。現実に生きているのだ。

現実という名の幸福が、彼に温もりを与えてくれている。

これは唯華がすっかり失った幸福。そしてようやく取り戻しつつあるもの。

ひかるという少女には感謝しなくてはいけない、と彼は思った。

熱意を失っていた唯華に再び熱意を与えてくれたのだから。

「・・・いい天気だ」

思えば、散歩といった形で外に出ることがなくなっていた。

あの頃は本当に幸せだった。

アリナと意見をぶつけ合いながら散歩していた。

「だからフラワーボーイの絵は生き生きとしすぎているんだってノ！」

「うぐっ・・・でも、仕方ないじゃないですか。人間好きという表現をするためには・・・」

「・・・二人とも、何言っているのかわかんないの」

幻覚だったのだろうか？唯華とアリナとかりんが一緒に目の前で歩いていた。手を伸ばそうとすると、ふっと消えてしまった。やはり幻覚だったのだ。

「よいしょつと・・・重いな」

「まったく・・・一人で全部持つなんて・・・」

「いえいえ、これくらいは余裕ですよ。なかなかさん」

華道のための花を運んでいる唯華とななかが目の前に現れたが、それも消えてしまった。

「お前はいつたいたいどうやって芸を身に付けたんだ？」

「練習」

嘘ではない。あくまで誓いの効力でやりやすくなってるだけで、努力は必要なのだ。

事実、ヒノカミ神楽を習得しようとして、小学生の時は何度も血を吐いた。

なんの努力もなしに王ゲイト・オラ・パピロンの財宝を使える二次創作の主人公が羨ましいくらいだった。

「練習・・・なるほど、それも一つの才能といえるか」

「そうなんだよな・・・俺よりもたくさん練習して、すごく上手い人はごまんといるし。

結局、練習こそが本当の才能なんだよな。俺にはそんなのがないけど」

転生特典とやらよりも輝くのが『努力』であると、転生してから思い知ったのだ。

「お前が言うと言説力があるな．．．それでも、お前はすごい奴だ」

そんな唯華と十七夜の姿もふっと消えてしまった。

物事が暖かく単純で、夏の太陽と冷たい草に満たされていた日々．．．。

それはもう二度と手が届きそうになかった。

失つてしまったものを思い出す度に、彼の心は凍り付く。

どうしてこうなってしまったのか、考えようとする。

その度に、やはり彼の心は凍ってしまふ。

心が悲鳴を上げているのも感じ取れた。

また幸福が逃げてしまうのではないかと震えてしまふようになる。

こういう時、どうすればいいか。彼は知っていた。

「よし、神楽の練習しよう！」

過去を振り返るな。今に熱中しろ。

そうすれば、辛い事も忘れられ．．．

「この馬鹿！」

後に、唯華が殴り飛ばされた距離を計測した者がいる。

その者による計算によると、だいたい百メートルくらい吹っ飛ばされたそうだ。

「なーにが、練習しよう、よーさつきからうじうじと．．．！」

「・・・阿見莉愛、突然殴るとはどういう了見だ？」

「アンタが私をイライラさせたからに決まっているわよ！」

いい加減、過去をちゃんと直視しなさい！

どうしてアンタが幸せを失ったのか、ちゃんと見なさい！」

その瞬間、新しい映像が彼の目の前に現れようとしていた。

しかし、彼はそれを根性で打ち消した。見たくない、とにかく見たくない！

「やだ！小生やだ！」

その後、唯華が巨大なクレーターの真ん中で倒れているのが発見された。

「・・・先輩、あの人って確か“神浜のダヴィンチ”って呼ばれてる人ですよね？」

「そうよ、つい最近までスランプの真っ只中だったわ。」

ようやく目がマシになったと思っただけ・・・。」

「スランプだったんですか!？」

胡桃まなかも水名女学園に通っているの、自然と唯華のことは耳に入ってくる。

しかし、スランプだという噂は聞いたことがなかった。

「どうしてそんなことを知ってるんですか？」

「幼馴染だからよ」

「なるほど、道理で先輩の名前を正確に答えられたわけですね。」

それはそうと、あんな状態で神楽の練習できるんでしょうかね？」

「それは問題ないわよ。もともと小学生の時から血反吐を吐いて練習してたし。

どれだけ体がボロボロでも、今ではもう神楽の練習くらい余裕でこなせるわよ」

「い、いったいどれだけ過酷な練習だったんですか……！」

「そりゃ過酷に決まってるわ。ヒノカミ神楽だもん」

「……??？」

まなかは亜米利加が何を言っているのか……

「阿見莉愛よ」

……加奈陀が言っていることを

「それは上の方にある国よ」

チツ、うつせーよ！反省してまーす。

「聞こえてるわよ？それが物書きとしての態度？だからお気に入り増えないのよ？」

「先輩、さつきから会話しちやいけない何かと会話してませんか？」

とにかく、まなかは阿見莉愛が何を言っているのか理解できなかった。

ヒノカミ神楽はヒノカミ以外に踊れる人間が少ないのだ。

踊れたとしても、ヒノカミと比べると見劣りしてしまう。

その神楽を、阿見莉愛の幼馴染である唯華は小学生の時から練習してるといふのだ。

「・・・うん？小学生のときから？」

ヒノカミがヒノカミ神楽の動画を投稿したのはここ一年のこと。

しかし、唯華は小学生の時から練習していたという。

ヒノカミは特定班の必死の作業により、十代後半であることはわかってた。
そして、唯華は十七歳である。

「・・・まさか」

「そのままかよ。アイツがヒノカミよ。知っているのは極一部だけだね」

「ええええええええ!!」

過去に付き合ってた子、略して『かこ』

ある日の昼下がり、唯華は調整屋でケーキを食べながら原稿用紙と睨めっこしていた。

リヴィア・メデイロスからちよつとした無茶振りがあつたからだ。

「・・・文学、ですか」

「そう。アンタ、ダヴィンチと呼ばれてるんやろ？」

小説や詩くらい簡単に書けるんちやう？」

「ダヴィンチは小説を書きませんでしたか・・・」

「そう固い事言わんといてや。」

ウチらの事情、ちよつとは知ってんやろ？」

まあ、「お客様」が来ても退屈させないために欲しいんや」

「・・・」

「小説か詩、どっちでもええで？」

「・・・」

有無を言わせないプレッシャーに押されて、仕方なく引き受けた。

みたまの調整屋で作業しているのは、雰囲気は落ち着いているからだ。

あつ、キーキは買ってきたものなのでご安心を。

本当は文学なんかやりたくなかったのだ。

「動くとうたらないだろ！動くとうたらないだろ！」

汚い作業曲を止めた。それでも、状況は変わらなかつた。

ふと、考えた。どうして自分は文学をやりたくなかつたのか。

「どうしたの？」

「いや、考え事をしていただけだ……あれ？」

隣には誰も座っていないなかつた。自分は誰と会話していたのだ？

急に頭に激痛が走つた。何も考えられない。

床に崩れ落ちる。何も見えない。

「調子はどうかし……唯華くん!? しっかりして! 唯華くん!」

唯華は里見メディカルセンターに搬送された。

「調子はどうだい? 唯華くん」

「……院長さん、また俺は血反吐を吐いて倒れたんですか?」

「今更、血反吐なんて君だったら吐かないだろ?」

今回は精神的なショックによるものだ……原稿用紙と睨めっこしてたようだね」

「ええ・・・前みたいなことになってしまいました」

「まあ、しばらく安静にしているんだ。」

それはそうと、君はここ最近予防接種を受けに来ていないようだね」

その瞬間、唯華はベッドから消えていた。

「恐ろしい結末を悟ったな・・・逃がすか」

唯華は走って、走って、ロビーの方まで逃げてきた。

しかし、既に院長はそこに立っていた。

「さ、先回りされただと！」

「この注射針が光って唸る！お前に刺せと輝き叫ぶ！」

グサッ

「アー、逝く・・・」

チーン

「病院内で医者に勝てると思えないことだな・・・もう聞こえてないか」
予防注射には気を付けよう！

ACジャパンはこの活動を応援してくれていたらよかったのに

なんやかんやで、唯華はベッドに戻された。

「また昔みたい一緒になの！」

「ふーん、アンタが唯華？覚えてないケド」

「・・・」

しばらくすると、阿見莉愛とまなかがお見舞いに来てくれた。

「・・・二度と文学はしないと誓ったのは誰だったかしらね？」

「うぐっ・・・」

「ほら、愛媛県名物の大番よ。これ食べて元気出しなさい」

「まなか特製のオムライス弁当ですよ！みんなで食べてくだ・・・」

「なんか、いてはいけない人がいるような気がするんですが、先輩」

「気にしちゃだめだわ」

その帰り道、まなかはあることが気になった。

「先輩、そういえば唯華さんはどうして文学をしていないんですか。」

「あれだけたくさん芸があるのに、文学だけは・・・」

「・・・彼も人間っていうことよ。」

「どれだけダヴィンチだの万能人だの天才だと称えられていてもね」

「・・・？」

「まなか、あなたは恋愛したことがある？」

「・・・ありませんね」

「唯華も昔は付き合ってた女の子がいたの」

「ホモじゃなかったんですか」

「その噂、間違いなくデマよ。浮いた話が少ないせいね」

その時、二人はまなか一派にばったりと出会った。

「むむっ、この流れからして、まなかさんと付き合ってたことに・・・」

「違うわよ、サブタイトル見なさい。確かにまなかさんとも仲良かったけど」

まなかはスマホを取り出し、サブタイトルを確認した。

「・・・かこさんと？」

「・・・」

かこは静かに頷いた。

「先輩、三年前と言いましたよね???

その時、かこさんは小学四年生くらいのはずですが???

「・・・唯華は十四歳だから、四歳差で済むわ。わ、私だって最初は反対したのよ！」

しかし、無情にもかこを除いたまなか一派は魔法少女姿に変身していた。

「・・・かこさんは帰ってください。これから血が流れますので」

「ロリコンは絶対に許さないネ」

「かこに手を出すなんて、ボクは絶対に許さない・・・!」

「唯華くん、死相が滲みでてるの!」

「えっ!?!」

とりあえず、阿見莉愛、まなか、かこの三人は神浜現代美術館に訪れた。

「先輩、どうしてここに連れてきたんですか?」

「見せたいものがあるからよ・・・かこさん、見せても大丈夫かしら?」

「ええ、大丈夫ですよ。いい思い出みたいなものですから」

三人はある絵の前に立った。

美しい絵だった。そこには鮮やかな緑色の長髪の少女が描かれていた。

ルネサンス様式の絵だ。作者名は聖道唯華。

「・・・もしかして、かこさんですか」

「ええ、昔は髪を長くしてたんです」

「確かこれは・・・唯華が中等部一年生のころに書いてたはずよ」

「先輩、だんだんアウトに近づいていますよ???

つまり、この絵のかこさんは九歳っていう計算になるじゃないですか???

「・・・一目惚れ、って唯華は言ってたわ」

かこは恥ずかしそうに顔を赤くした。

まなかは考えるのをやめ・・・ようとしたら阿見莉愛にビンタされた。

「しゃんとなさい。今はあなたが一番のツツコミ役なんだから」

「あつ、はい」

それから阿見莉愛は唯華とかこの出会いについて話し出した。

ある日、偶然にも唯華は夏目書房の前で血反吐を吐いて倒れた。

「その日の神楽の練習は厳しいものだったわ。

いくら中学生とはいえ、彼の肉体には負担が大きかったのよ。

それなのに、私がいくら止めようとしても、言うこと聞かずに遊びに出かけたの…。

だから、家で休んでろって言ったのに・・・思い出しただけでもイライラしますわ」

幸運だったのは、夏目書房の前だったということだろう。

倒れた唯華を、かこが発見してくれたのだ。

そして・・・。

「私に一目惚れして、急に治ったっていうんです」

「先輩、考えるのをやめていいですか？」

「まだ駄目よ」

さらに言えば、偶然にも美術の先生から出された宿題が彼にはあったのだ。

「・・・その宿題をやった結果が、これですか」

「そうです。あまりにも美しいのでこの美術館に展示されることになりました」

「なんの脈絡もなく出てこないでください、麻友先輩」

「美術館のあるところ、私あり。マジレコRTAの基本ですよ？」

私が好きな走者の皆さんは、積極的に美術館に来てください」

「作者が器物損壊罪で訴えられなくても、詐欺罪で訴えられますよ？」

話が脱線しそうになったので、阿見莉愛は麻友を腹パンで気絶させた。

「・・・さて、話を続けますわ」

それから一年ほど、彼は夏目書房に通うようになり、紆余曲折あつて二人は付き合つた。

「シヤマラン監督並みに無駄な贅肉のない地の文ですね。」

これだったらセリフの多いハムレットだって簡単にまとまりますよ」

王子さまはおじさんがきらい

さあ大変

WRITTEN AND DIRECTED BY M. NIGHT SHYAMA
LAN

「仕方ありませんわ。かこさんをいじめようとした奴をヒノカミ神楽でボコボコにした
り、

かこさんに贈るためのを探しに住民が全員人形の不思議な街に行ったり、
かこさんに危害を加えそうな悪魔の箱とやらを処分するために鉄道の旅に出たり、
誘拐されたかこさんを助けにデスバレーに乗り込んだり、

考古学者兼ロイド保険組合調査員の元軍人と一緒にかこの好きな物を推理した
り……。

挙句の果てには、かこさんのお父さんとサーベルで決闘したり……。

それ一つ一つを書くだけで文字数がとんでもないことになりますわ」

「とんでもない紆余曲折ですね。これはシヤマラン監督が必要そうです」

ここで麻友が復活した。

麻友「地の文減らして、SSみたいにすればいいんですよ」

あきら「今日は素敵な日ですね」

美雨「花も咲き誇って、小鳥もさえずってるネ」

ななか「こんな日にこそ、唯華さんみたいな口リコンには……」

ななか・あきら・美雨「地獄の業火に焼かれてもらおう」

唯華」

麻友「ほら、文字数少なくなったで・・・」

亜米利加「阿見莉愛よ。これ以上脱線するといけないから、眠ってもらうわ」

阿見莉愛は麻友の頭を掴み、彼女を壁に叩きつけた。

彼女はぐっすりと気絶した。

「・・・唯華さん、大丈夫でしょうか？」

「ゆーくんだったら大丈夫ですよ。強いので」

「あつ、唯華さんのことゆーくんって呼んでるんですね」

「ここで、まなかは閃いた。

「わかりました！まなか、わかりました！」

おそらく、唯華さんとかこさんは酷い別れ方をしたんです！

そのシヨックで・・・」

まなかは床に叩きつけられ、巨大なクレーターが完成した。

「・・・ごめんなさいね、かこさん」

「いえ、いいんです。ある意味当たっているのです」

まなかは血を流しながらも、根性で立ち上がった。

「ある意味・・・？」

「・・・唯華とかこさんは円満に別れたわ。」

でも、人によっては酷い別れ方とも捉えられるわ」

「そ、それは一体どういうことですか．．．？」

しかし、これ以上は文字数が多くなりすぎる。

「「えっ」」

続く

オルガ・イツカ「だから唯華は文学をやめた」

付き合うまでの一年間のごたごたとは対照的に、

唯華とかこの日々は平穏なものであった。

ゲームBGMで例えるなら、M i n e c r a f t の C 4 1 8 の s w e d e n みたいに。

他の転生者が見たら驚いただろう。

二人のいる空間だけがマギレコではなくマイクラなのだから。

そんなある日のことであつた。唯華は小説を書いてみようとした。

「・・・むう、駄目だこりゃ」

「どうしたんですか?」

「いや、小説書いてみたんだけどさ・・・生命感がないというか。」

全部、俺が考えたものだから、操り人形みたいになつてしまうんだよ」

あくまで彼の能力は文化侵略。

コツが掴みやすくなるとか、そういうのだけだ。

最初から色々な技芸が身につけているわけではないのだ。

結局は練習が必要となる。パワプロと同じなのだ。

もし天才というステータスが付いても、練習は必要だ。

作者も天才証明書を手に入れたが、それを思い知った。

そして、唯華はかこに殴り飛ばされた。

「アプローチが間違っていますね。これだと作文です。

キャラクターの十分間の行動にはその人の十年分の経験が反映されているんです」

「・・・なるほどね。じゃあ、かこを主人公にするとなると、

十二分間の行動には、十二年分の経験が必要になると」

「そういうことですな」

「ところで殴る必要あった？」

「熱血ものを読んでいたら、つい・・・」

この時点で、二年間付き合っていた。

最初でも言ったが、本当に平穏な毎日だった。

「どれくらい平穏だったんですか？唯華さんが殴られた時点で平穏じゃない気がします
が」

「・・・そうね、唯華は神楽の練習をするとき、とても怖い表情してたの。

それがね・・・練習の厳しさは同じなのに、穏やかになったのよ」

「私も練習の手伝いをしていましたが．．．とても美しかったです」

しかし、この時点で終わりが見えていたのだ。

唯華はかこみたいな子を主人公にしようと小説を書いていた。

そのために、様々なことを想像した。

その主人公がどう生まれたか、どう育ったか、どんな映画を見ているか、

どんなウェブサイトを見ているか、どんな音楽を聴いているか。

ちなみに、どんな化粧品を使っているかは想像したことなかった。

彼女は、化粧品を必要としないと、なぜか想像していたからだ。

そうして、キャラクターを創り上げていつてみた。

ある日、いつものようにヒノカミ神楽を練習していた。

そのとき、一緒にいたのは阿見莉愛だった。

かこもいればいいのにと思ったが、彼女は少し用事があったのだ。

それで、かこそつくりのキャラクターと一緒にいる想像を試してみた。

彼女はそこでまじまじと練習風景を眺めている。

そして、につこりとこちらに微笑んで．．．。

唯華は不意を突かれて、つい捻挫してしまって、里見メディアカルセンターに搬送された。

微笑ませるつもりなどなかったのだ。だが、彼の想像の中の彼女は彼の意思に反した。

「・・・すまん。ちよつとしくじつたというか」

「気をつけてくださいね・・・はい、デカビタです」

それは唯華の大好きな炭酸飲料だった。二人を暖炉の火が照らして・・・。

しかし、気づくとそこはメデイカルセンターの病室だ。暖炉なんて最初からない。もちろん、かこそつくりのキャラクターもないのだ。

唯華の想像が勝手に暴走した結果なのだ。

次の日、現実のかこにそれを相談してみた。

「・・・やっぱり、動き始めたんですね」

「えっ?」

「ゆうくんの創造したキャラクターが動き出したんですよ」

「・・・俺は今まで勘違いしていたんだ。」

小説の登場人物は作者にコントロールされていると思つてた。

状況も、台詞も、何もかもが作者にコントロールされてるつてね。

でも、それは違つた」

「・・・そうなんです。私も本を読んで気づいたんですが、

一流とされてきた古典を書いてきた人たちは統制なんてしてなかったんです。

作中人物は確かに作者の心の中で生まれてきたけど、作者たちの手を離れてきたんです。

そして、作者はそんな彼らを勝手にさせて、そのあとをについていただけなんです」

「じゃあ、シエイクスピアとかトルストイは覗き魔だったってことか」

「・・・悪く言うと、そういうことになりますね」

「・・・かこもやったことあるのか？」

「ええ、一度だけ。私だけの王子様、みたいなキャラクターを。」

「ゆーくんに会う前から、ずっと」

唯華は深い溜息をついた。

「これ以上続けたら、どうなるんだ？」

「・・・手遅れになりますね、今の私みたいに」

「それで終わりだった。両者をつないでいた糸が静かに切れたのだ。」

「えっ???つまり、両者ともに空想の恋人を創り上げて・・・」

「ええ、それで別れることになりました」

「???」

まなかは考えるのを・・・

「しゃんとしなさい！」

「あべしっ」

阿見莉愛にビンタされた。

「・・・確かに円満ですし、酷いとも言えますね」

「確かに後悔は少しあるけど、私もゆうくんも受け入れていきますから」

阿見莉愛は溜息をついた。

「はあー・・・受け入れてるんだったら、どうして唯華はああなつてんのよ・・・」

そのころ、唯華はアリナに殴り飛ばされていた。

彼は病院の窓を突き破り、どこか遠くに吹っ飛んでしまった。

「ハア・・・ハア・・・どういわけか記憶が復活したんだケド？」

「アリナ先輩、いくらなんでもひどいの！」

「フルガール、あの野郎にはこのくらいいしないと駄目なんだヨ」

奇しくも、唯華も御園かりんに昔のことを話していた。かりんにせがまれたからだ。

それを聞いていたアリナはだんだんと腹が立ってしまったのだ。

あまりにも腹が立って、果てなしのミラーズの奥深くにあるはずの記憶が戻ってきたのだ。

さて、視点を神浜現代美術館に戻そう。

「もしかして、文学をやっていないのって・・・」

まなかはついに気づいた。

「そうよ、昔のことを思い出すからでしょうね。」

今回搬送されたのも、どうせ隣に空想の恋人が現れたからに決まっていますわ」

「そ、そうなんですか・・・」

その時、麻友が復活した。

「・・・こうなったら、私が唯華さんを励ますしかありませんね」

特に理由しかない膝蹴りが麻友を襲う！

麻友はまたしてもぐっすりと気絶した！

「この子は寝かしつけといてっど・・・お断りする必要があるわね。」

みたまさんから事情は聞いてましたから」

「お断り？」

阿見莉愛はまなかを連れて、中央区のピュエラケアの拠点に移動した。

「かくかくしかじか・・・というわけで、唯華に文学はやらせないでほしいわ」

「・・・わかったわ。ごめんな、無茶言うて」

「いえ、私も気に掛けるべきでしたから・・・」

そのころ、唯華はどこかの裏路地で目を覚ました。

幸い、来ている服は外出用の私服のままだったので、怪しまれることはない。

「……だ、大丈夫ですか？」

「ああ……なんとかな。まったく、アリナの奴……」

唯華は自分を心配してくれている目の前の少女に見覚えがあつたが、思い出せなかつた。

立ち上がろうとするが、なかなか立ち上がれなかつた。

そうしていると、目の前の少女は手を差し伸べてくれた。

「ありがと……」

彼女の手に触れた瞬間、名前を思い出した。安積はぐむだ。

「……もしかして、はぐむさん？」

「……！そうです」

「一度話してみたかつたんだ。演劇部で綺麗なドレス作つてたから」

これはまごうことなき彼の本音だ。何の下心もない、純粋な言葉。

「そ、そうだったんですか！ありがとうございます！」

唯華は知らない。この言葉が、彼女にとって大きな言葉であつたと。

その後、はぐむの助けを受けながら、なんとか家まで帰ることができた。

ピユエラケアから頼まれた仕事は阿見莉愛が断つてくれた。

後日、ケーキを奢らされるはめになったのだが。

浸透していく文化

ワルプルギスの夜が襲撃してきた日、ヒノカミは現れた。

魔法少女たちが満身創痍のなか、彼は絶望に立ち向かった。

彼が与えられたのはかすり傷、でも、それは魔法少女たちにとって希望の光。

さらに、天から降ってきた羽から彼女たちは力をもらった。

ワルプルギスの夜を倒した彼女たちはヒノカミに感謝した。

まあ、阿見莉愛はヒノカミこと唯華を説教したが。

それからしばらくして・・・

「反省会よ・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

PROMISED BLOOD、略してミスドはひどい目に遭った。

いつものように神浜に一発かましてやろうと思ったら、こつちがかまされたのだ。

「・・・アイツら、自分たちを別作品の住人だと思っ込んでる異常者になりやがった」

体中に傷を負った大庭樹里はそう吐き捨てた。

「ごめんなさいいっす、ごめんなさいいっす、殺さないでほしいいっす……」
ひかるは隅でぶるぶると震えていた。

ここ最近、神浜マガリアユニオンの魔法少女が急に強くなったのだ。
ベッドには包帯でぐるぐる巻きになった智珠らんかが横たわっていた。
可哀想に。彼女は水波レナと秋野かえでと戦ってしまったのだ。

「ミズカミ神楽！」

「は、ハナガミ神楽！……ふゆう、やっぱり大変だよお」

当然の結果であった。生きているのが奇跡なくらいだ。

「見て、うららさん！私、ツキカミ神楽っていうの思いついたんだ！」

「す、すごいんよ……だから、その包丁をしまっ……なんよおおおお！」
色々とカオスと化していた。文化侵略の賜物だ。

そんなことも露知らず、唯華はパンフルートを吹いていた。

満月が南風の海を照らしている。

その隣に、春名このみが座ってきた。

「お久しぶりですね、唯華さん。今日は月が綺麗ですね」

「……久しぶり、このみ」

練習を再開した。

演奏している曲は「海の見える街」。

吹き終わると、このみは拍手してくれた。

「そういえば唯華さん、華道はまだ再開しないんですか？」

「俺を破門した本人が蘇ってくれたらあるかもな」

「・・・寂しいです、唯華さんが来てくれなくなつたから」

「それはないんじゃないか？かことか来てくれるようになったじゃん」

「そうですけど・・・あれ、どうして知ってるんですか？」

「かこの元カレ」

「そうだったんですか・・・何年間付き合ってたんですか？」

「このみの目が鋭くなる。

「確か・・・かこが小4のときから小6までの二年間だったはずだ」

「親方に・・・じゃなくて、阿見莉愛さんに電話させてもらうね」

「阿見莉愛はそのこと知ってるし、もし電話したらお前がホモガキだって言いふらすぞ」

「なっ、私はホモガキなんかじゃなくて正統な淫夢厨で・・・あっ」

「本性現したね」

彼は嬉しかった。文化侵略が着々と進んでたからだ。

これは前世での経験だが、淫夢語録はいくらか人を穏やかにしてくれるのだ。

事実、暴言しか飛び交わないニュースアプリでは淫夢語録を目にしたことはない。

淫夢語録が使われるようになった場所では暴言が減ったのに。

この理不尽な世界は、少しずつ寛容になっっているようだ。

「・・・唯華さん、本当は華道やるのが怖いんじゃないんですか？」

「だろうな・・・また、あんな目に遭うんじゃないかと思うとな」

「勇気を出してください。ちょうど、唯華さんにぴったりの花があります」

彼女はポケットから白い押し花を取り出して、唯華に渡してくれた。

「今日作ってみました。エーデルワイス、花言葉は・・・」

「勇気、だろ」

彼はそれを大事に懐にしまった。

「ただの勇気じゃありません。高潔な勇気です」

「一番俺に似合わない花じゃないか・・・たまげたな。」

俺に合う花はシャクヤクとカサブランカぐらいだよ」

「羞恥心と自尊心・・・妻子捨てて虎になったコミュ障下級官吏じゃあるまいし・・・」

「お前は李徴になんか恨みでもあるの？」

「あまりにも李徴の性格が酷すぎて文句がで、でますよ」

二人は笑い合つた。これが淫夢語録の力なのだ。

日常のなんでもないささやかな幸せが、さらに幸せになる魔法。

だが、月が黒い雲に隠されてしまった。

唯華は不安に襲われた。これはまるで自分の人生そのものだ。

幸せな時間が訪れたと思つたら、それは瞬く間に黒い闇に覆われる。

「唯華さん？汗かいているようですが、大丈夫ですか？」

「・・・大丈夫だ」

呼吸を整える。大丈夫だ、落ち着け。

それでも、嫌な記憶が蘇ってくる。

「みたまは水名女学園に通えた！俺は絵を描けて、ピアノも弾けて、フルートも吹ける！

優勝トロフィーや賞状なんて飽きるくらいにたくさんもらった！賞金だつて一生遊

べるくらい！

何も成したことがないお前らのようなミジンコが、みたまを非難する資格なんてない

んだよ！」

友情を失いました

「それはそうと、お前は破門だ。二度と華心流に入るな」

勝利する術を失いました

「……さん！……華さん！唯華さん！」

このみはついうっかり唯華を殴り飛ばしてしまった。

そして、そのまま海にざぶんと波しぶきを上げながら着水した。

「ごめんなさい！唯華さん！」

「いや、いいんだ。おかげで意識が戻ったというか……」

パンフルートはしっかりと掴んでいたので無事だった。

空を仰ぎ見る。星空は、都会の光のせいでぼやけてはいるが、綺麗だった。

彼はゆっくりと砂浜に這い上がった。

努力だけが俺の忠実なる僕でした

次の日、彼は風邪を引いた。

アంతはここでふゆうと舞うのよ

風邪一日目は自分を嫌っているかと思っていた男子生徒がお見舞いに来てくれた。

「……ごほつ、ほんとすまんかった。あんなに酷い事言ってしまったて」

A 「ミカン食べちまいましたよ」

B 「そのためのミカン」

C 「金、暴力、ミカン」

「神浜少年はミカンなことしか考えないのか（偏見）」

とりあえず、ミカンを口にぶち込まれた。

しかし、今までのように冷えた関係ではなくなった。

これが淫夢語録の力なのだ。

さて、今は風邪二日目。

そういうわけで、いつもの練習場に来たのだ。

「……」

風邪なのに神楽？という疑問は湧くだろう。

しかし、ヒノカミ神楽は全集中の呼吸であることをお忘れなく。

呼吸パワーで、逆に健康に効果があると証明されていると思う。
まだガンには効かないが、いずれ効くようになる。

「・・・」

最初は呼吸が乱れたが、だんだんと落ち着いてきた。
熱も少しずつであるが、引いているような気がする。

「ふゆう・・・すごいや・・・」

彼はピタッと動きを止めた。

「あっ・・・ごめんなさい、邪魔しちゃって」

「いや、大丈夫だ問題ない」

神楽を再開する。これくらいは朝飯前だ。

実際、まだ朝の六時なので朝飯前だ。

「・・・ふゆう」

少女が感嘆するくらい、彼のヒノカミ神楽は洗練されていた。

そして、いつの間にか少女も舞い始めた。

それはヒノカミ神楽にどことなく似た神楽だった。

違うのは、何をイメージとした神楽なのかということ。

ヒノカミ神楽は文字通り、太陽または炎をモチーフとした神楽で、どこか幽玄なもの

である。

一方、少女の舞う神楽は花をモチーフとしたような神楽だ。

その動きはどこか天女を連想させ、ふわふわとした良い匂いもしてきて、華やかなものだった。

二人は舞い終わると、気が抜けたように倒れてしまった。

「・・・すごく綺麗だったよ、君の神楽」

「ふゆっ!? そんなことないよ! あなただつてヒノカミ神楽を踊れるじゃん!」

「そりゃ小学生のころから練習していればな・・・」

「小学生のころからつて・・・あれ? ヒノカミ神楽が投稿されたのつて・・・」

「それに関しては深く考えない方がいい・・・もう一回、一緒に踊らないか?」

「・・・うん!」

二人はさつきぐつたりと倒れたのが嘘のように、元気に立ち上がり、舞った。

それは美しい二重奏だった。幽玄さと可憐さが合わさっていた。

それはもう、作者の語彙力では表現できないほどに。

そんな二人の神楽をレナと十咎ももこはじつと見つめていた。

「・・・レナ、悔しいんだけど」

「ああ、アタシもだ」

大切な友人が見知らぬ男と舞っていて、自分たちと一緒に舞っているときよりも美しかった。

さて、唯華はもう少し考えるべきであった。

どうして秘密の練習場であるこの野原に少女がやってきたのか。

「・・・唯華さん、ですよね？」

その冷えた声が、その場を凍らせた。

環いろはだった。

「今更、教える気になったんですか？」

あの時、私には教えようとしなかったくせに・・・。

どうして、かえでちゃんには教えているんですか？」

「ふゆっ!? 教えてもらってるんじゃないかって・・・」

「じゃあ、俺はこれで失礼する」

唯華は恐ろしい結末を悟って、一目散に逃げだした。

「失礼しないでくださいいよ」

しかし、回り込まれた。

最後に彼が見た光景は、眼前に迫ったいろはの拳だった。

彼が里見メデイカルセンターに搬送されることはなかった。

なぜなら、搬送される前にそこまで吹っ飛ばされてしまったからだ。

「また君か、壊れるなあ」

院長は呆れた。

世界のY u i c a!?

気がつけば、唯華は博物館を歩いていた。夢だということは理解できていた。

そこには自分の記憶や大切にしてきたものが展示されていた。

色々なコンクールで優勝した記憶、そこでもらったトロフィー、

かこのために手に入れたプレゼント、パンフルート……。

だが、どうしてもモザイクがかかっていて見えないものもあつた。

それは悲しくて、辛くて、忘れたい記憶。

当然、そんなものは見たくなかつたので無視しようと……

「だから見ろつて言つてるんですの!」

「夢の中でも俺を殴るのかよ!」

気がつくと、彼は病院のベッドの上だつた。

「だ、大丈夫なの?」

「ああ、大丈夫だ、かりん。阿見莉愛の奴が夢の中でも理不尽に暴力を……。

あれ?なんで俺入院してんの?血反吐は吐いてないし、文学はやつてないし……」

「どういうわけか病院に吹っ飛んできて、意外と大怪我だったから入院させられたの」

「・・・思い出したよ」

その瞬間、ドアが吹っ飛ばされた。環いろはが入ってきたのだ。

ちなみに、吹っ飛ばされたドアは窓ガラスを突き破った。

「・・・唯華さん、さつきはごめんなさい」

「せめて言葉と行動を一致させよう？あと、怒ってないから。暴力は日常茶飯事だし」

「後で弁償が待っているに違いないの」

「本当のことを言うと、もう唯華さんに教えてもらわなくてもいいんです。

それなのに、さつきはつい誤解しちやって・・・」

「まあ、誤解は誰にでもあるもの・・・えっ、教えてもらわなくてもいい？」

「はい、自分で唯華さんの投稿した動画を見て、自分で練習したんです」

唯華は嬉しいような悲しいような気分になった。

原作とやらが始まる前、彼は里見メデイカルセンターでヒノカミ神楽を披露したことがある。

院長とその娘の里見灯花、柊ねむ、そして環姉妹の前で。

その後、いろはからヒノカミ神楽を教える欲しいと頼まれた。

ういたちに見せるためだと言っていた。

病院だと、どうしても娯楽が少なくなるから。

「・・・駄目だ、俺でも何十回と血反吐を吐いたんだ。

君の体で耐えられるかわからない。君を死なせるような真似はしたくない」

「そんな・・・！お願いします・・・！」

「駄目なものは駄目だ。帰ってくれ」

しかし、よくよく思い出したら彼女はマギレコとやらの主人公だった。

つまり、魔法少女だ。魔法少女であれば練習もいくらか余裕になるであろう。

「・・・念のため、見せてもらえるか？」

「はい、ちょうど神楽鈴を持ってきていたので」

「それ俺のじゃん。持ってきてくれたのは嬉しいけど」

いろははヒノカミ神楽を静かに、美しく舞い始めた。

微かにゴオオオという呼吸音も聞こえてくる。全集中の呼吸だ。

彼女は完全にヒノカミ神楽を体得していた。

唯華が十年以上もかけて体得したそれを、彼女は動画を見て体得したのだ。

悔しかったけど、仕方がないとも思った。

ならば、もっと練習して彼女が追いつけないところまで行けばいいのだから。

円舞、碧落の天、烈日紅鏡、灼骨炎陽、陽華突、日暈の龍・頭舞い、斜陽轉身、飛輪
陽炎、

輝輝恩光、火車、幻日虹、炎舞……。

彼女は十二の型を完全にこなしていた。

「……ふう、やつぱり疲れますね」

「やめたk」

「それ以上は言っちゃだめなの！」

かりんに殴り飛ばされた。

「……いろは、おめでどう」

「……ありがとうございます！」

「お礼を言うのはこつちだよ。ヒノカミ神楽が伝承されたわけだから」

唯華は自分の仕事の一つ終わったのを感じた。

「すこかったです、いろはさん！」

「すつごくCoolだったデース！」

理子と知らない外国人女性がいつの間にか病室に入っていた。

神楽を見るのに夢中で気づかなかつたのだ。

「はい、唯華お兄さん、朝ご飯持ってきましたよ

風邪引いたのに無茶しちゃだめですよ。阿見莉愛さん怒ってましたから」

「ありがてえ……それはそうと、退院した後が怖い」

「それはそうと、わたしもヒノカミ神楽踊れるようになりましたっ！」
「へっ?」

そういうと、理子はいろはから鈴を借りて、綺麗に神楽を舞った。
彼女と同じ歳だったときは、血反吐を吐いていたはずなのだが。

どうにもマジウスの魔法少女至上主義は微妙に正しかったようだ。

「いいね、理子! すっごくKAWAIIデスネー!」

「ありがとう、アシュ!」

「・・・」

彼は茫然とした。

「ところで、この人はもしかして・・・Y u i c a デスカ?」

「そうだよー!」

アシュと呼ばれた少女は目を輝かせた!

「初めまして、Y u i c a ! 私はアシュリー・テイラーデス!」

アナタのこと理子からたくさん聞きマシタ! それに、アメリカでも有名デス!

「先輩、また何かやっちゃったの?」

「すまん、心当たりが多すぎて・・・」

「じゃあ・・・Last and First Men! KAWAIIものじゃなかった

けど、すつごくC o o r デシタ！」

「おお、確かに作った覚えあるな！」

一時期、架空の歴史の年表を作るというのがアメリカで流行した。

そして、唯華はアメリカのネットに自作の年表を投稿したのだ。

およそ二十億年分の歴史が詰まったLast and First Menはすごくバズった。

第一次大戦後の英仏戦争から、海王星の〈第十八期人類〉までというスケール……ぶつちやけると、前世のSF小説をだいぶ参考にしたが。

「私の好きだったのはへはーつ・おぶ・あいろん！〜デス！……ダディも好きデシタ！」

「おお、あれか！確かにアレは自信作だったな」

当時、無料の戦略ゲームを欲していたアメリカ人のために作ったゲームだ。

……ゲーム内の史実上の人物が全員、可愛い少年少女になってるが。

噂によると、このゲーム内に登場するヒトラーは今のドイツでも合法らしい。なにしろ、可愛いシヨタだからだ。決して、ちよび髭のオッサンではない。

「一つ不満なのが、バチカンの強さと教皇のデザインデス！」

「あはは……」

唯華のおふぎげにより、バチカン市国がラスボス級になってしまったのだ。

人的資源もソビエトを超えていて、政治力もトルコを圧倒している。

そして・・・教皇のデザインだけが史上最悪の独裁者全員を合体させたものになってしまった。

余談だが、キリスト系カルト集団は十字軍を神浜に派遣しようとしたらしい。

「もつと好きなのが、Green Girlデス！」

「へっ？」

「これデス！これ！」

アシユリーはスマホで画像を見せてくれた。

それは、例のアレだ。九歳のかこをモデルにした絵だった。

クリスマスツリーと共に飾られていた。

「・・・ロックフェラー・センターに飾るって本当だったの？冗談かと思ってたんだけど？」

「すつごくkAWAII絵デス！さすがはYuica！」

「??？」

「唯華先輩がフリーズしてるの!？」

唯華は考えるのをやめた。

まさか、文化侵略が日本ではなくアメリカで進んでいるとは思わなかったのだ。

まあ、マギレコ世界だから多少はね？

「・・・たまげたなあ」

「GOROKUデスネ！アメリカではすつごく流行してマース！

それのおかげで、人種差別が減りマシタ！もしかして・・・」

「いや、さすがに作ってないって。広めはしたけど」

いろはは茫然としていた。唯華がそこまですごい人だとは思わなかったのだ。

かりんはまだ茫然とはしていなかったが、アリナの影響が大きい。

「あつ、Yuicaさんに会わせたい人がいるんデス！入って、ドウゾ！」

病室に爽やかそうな好青年が入ってきた。

「どうも、唯華さん。僕は瀬宮勝と言います！」

「マサルは私のステイ先のルームメイトデス！」

お互い、目を見てわかった。

（転生者かよ・・・）

（僕以外にも転生者がいたんですか・・・）

＜ 突然のバトル展開 ＞

アシユリーが二人きりで話してきたらと提案してくれた。
そういうわけで、トイレのある公園にやってきたのだ。

どうしてトイレのある公園かって？意味はない。

「・・・まさか、俺以外にも転生者がいたなんてな」

「まさか、僕も」神浜の「ダヴィンチ」が転生者だとは・・・」

「待つて？いくらなんでもわかるんじゃないか??」

あんだだけ派手に行動しているんだから」

「いえ、てつきり僕が転生した影響かと・・・」

「・・・まあ、俺も一人だけだと思ってたからな」

二次創作でも、他に転生者がいるというのは珍しい展開だ。

リリなの？あれは別格だから・・・。

「それに、原作介入とかあまりしてなかったじゃないですか？」

「だって、文化侵略が目的だったし・・・」

そういうと、瀬宮は少し笑ってしまった。

「僕は嫌いじゃありませんよ、そういうの。」

ただ、淫夢語録の件に関しては許しませんけど。

僕には小声で言つてたの、聞こえてましたからね。

あんな汚物を聞かされる身にもなつてくださいよ」

「許してクレメンス」

「そういうところですよ．．．僕の目的は、ただ強くなることです。」

淫夢語録なんて聞いていたら、強くなるうという意思が弱くなつてしまう。

前世では、弱いせいで色々とあつたので．．．」

瀬宮の表情からして、彼は前世であまりよくない目に遭つたのだろう。

その瞳には、目標に向かおうという熱い炎が灯つていた。

「．．．そうか、すごく芯が強いんだな」

唯華は目の前の好青年が羨ましくなつた。

彼は自分と違つて、心が強いのだ。

「それでも、未だに僕は弱いんです．．．少し前のことなんですが」

それはある日のことだつた。よく行く馴染みの店の看板娘から呼び出されたのだ。

「話つてなんですか、鶴乃さん」

「わ、わたしと付きあつ、付き．．．私の弟子になれ」

「???

もちろん、瀬宮は必死に抵抗した。

だが、三人に勝てるわけがないように、魔法少女には勝てなかった。

「じゃあ、一緒にのんびり修行しようよ!」

「ちくせう」

それから、瀬宮の日常は壊れてしまった。

いつも計画的だった修行が、滅茶苦茶なものにされてしまった。

彼の格闘技はテコンドーなのに別の格闘技をやらされ、

修行の後には必ず50点の中華料理を振舞われ、

そもそも修行自体が無計画なものという散々な目に遭っているのだ。

「そういうわけで、なんとか時間を見つけては自分で修行しているんだ。

ちゃんと強くなって、鶴乃さんの弟子を卒業しないと……」

「そりゃ酷いな……ヒノカミ神楽、教えてやろうか?」

「鬼滅のパクリじゃないですか」

とりあえず、唯華は瀬宮を殴り飛ばした。

「まあ、もしかするとお前に合っていないかもしれないが、参考にはなるだろ。

一応、俺は神楽でワルプルギスにかすり傷をつけたが……」

「それでも十分ですよ！ありがとうございます！」

そのころ、病室では女子会になっていた。

「マサルは良い人デス．．．でも、朴念仁なんデス。

私がいくら気を惹こうとしても、まったく動じないんデス」

「男子つてそんなものですよ？ういだって、唯華さんの気を惹こうとしても．．．」

病室に入ろうとしたういは悶死した。

「でも、もつと不安なのは、マサルが最近辛そうなことなんデス。

やけにトレーニングの時間が不規則になったり．．．。

私が理由を聞こうとしても、ただ苦しそうに笑うだけなんデス．．．」

理子も同意した。

「そうなんです．．．唯華さんも辛そうな時があったのに、言ってくれなくて．．．」

なにはともあれ、数日後．．．。

みかづき荘で鶴乃は正座させられていた。

「告白しようとアタフタして、それで無理矢理弟子にしたと？」

鶴乃．．．アンタ何してんの???

やちよは溜息をついた。

「だって．．．」

「だって、じゃないわよ……。せつかく、アドバイスしたのに……」
「ふええ……」

本来、鶴乃は瀬宮を弟子にする気などまったくなかったのだ。

ただ、彼とのんびりしたかっただけなのだ。

だが、緊張のあまり、彼を打ち負かして弟子にしてしまったのだ。

「今すぐ彼に謝って来なさい」

「はい……」

「よかった、ようやく弟子から卒業できるんですね」

いつの間にか、瀬宮がそこにいた。

「瀬宮くん!？」

「……あなたが瀬宮勝ね。どうやって入ってきたの?」

「唯華さんが開けてくれました」

唯華「やつば、ピッキングは人助けのために使うべきだよな!」

阿見莉愛「犯罪よ??」

鶴乃はすぐ顔色を赤くして、蒸気を出していた。

「鶴乃さん……とりあえず、勝負しましょう。」

それで、今までのことは水に流すということまで」

「・・・瀬宮くん！」

ちなみに、唯華は阿見莉愛によって壁に叩きつけられていた。

「・・・ふう」

やちよは安堵の溜息をついて、スマホを取り出した。

「これでサブタイトル詐欺にならないわね」

決戦が始まる。舞台は唯華がいつも練習に使う野原。

意外と観戦者は多く集まった。

唯華と阿見莉愛とまなかはもちろんのこと、ももこのチームも来ていたし、

みかづき荘の一員も集まっていた。あとは都ひなの、木崎衣美里、観鳥令、万年桜、牧

野郁美だ。

ひなの達はたまたま暇だったので観戦しにきたのだ。

「・・・いくよ、瀬宮くん。さっき約束した通り、私が勝ったら童貞もらうからね」

「そんな約束した覚えはないんですが??」

最初に、鶴乃が攻撃を開始した。

炎を纏った斬撃が彼に向かう。

「独島・水軍式」

まるで、瀬宮が静かな海面に浮かぶ孤島になったようだった。

彼は静かに水を纏った打撃で斬撃を打ち消したのだ。

間合いに入ったすべての攻撃が無効化されるテコンドーの奥義。

「次はこつちから行きます」

彼は両手を組んで人差し指を突き出した構えをとった。

「重根・水軍式」

彼の指の先端から、光速の水滴弾が放たれる。

鶴乃はそれを間一髪で避けることができた。

「ふゆう・・・まるで、ミズカミ神楽みたい」

「みたい、じゃなくてそのものよ。あいつの呼吸音聞いてみて」

レナの言う通り、瀬宮はヒユウウウという呼吸をしていた。

それは奇しくもミズカミ神楽と同じ呼吸音だった。

「レナのパクリじゃない!」

「ふゆう、レナちゃん子供っぽいよ。」

それに、あの人はミズカミ神楽のこと知らないと思うし・・・。

そもそも、ミズカミ神楽はやちよさんが編み出したから、パクったのは・・・」

そして、胡桃まなかは冷や汗を流しまくっていた。

「こ、この状況、マズすぎます! テコンドーはテコンドーでも、劣等殲滅の方じゃないで

すか!」

「大丈夫よ、どうせ読者は知らないわ」

「先輩、もし読者の皆様が新しいタブを開いて調べたらどうするんですか!?

というか、色々な意味で有名ですから!あのテコンドー!

ああ、こうしている間にもお気に入りが入りが解除され、低評価の嵐に……!」

瀬宮は次の攻撃に移ろうとしていた。

彼は腕に水を纏わせ、鶴乃に猛スピードで向かっていった。

「こ、こっとなつたら第二のヒノカミ神楽で……!」

鶴乃は呼吸を併用した攻撃を何百と放つが、彼はそれをするりと避けていった。

「日成・水軍式」

水流を纏った手刀が鶴乃の顔面に直撃する。

彼女はそのまま崩れ落ちた。

「大丈夫ですよ、しばらくすれば目覚めますから」

そう言つて立ち去ろうとした瀬宮を唯華は呼び止めた。

「ちよつと待つて、俺が教えたのはヒノカミ神楽だけだったはずだ。

それなのに、どうして……その……」

「簡単な話ですよ。ヒノカミ神楽は始まりの呼……神楽ですから。

それを応用すれば、水つぼいのは出せるはずなんです」

水の呼吸は元をたどれば日の呼吸（ヒノカミ神楽）である。

つまり、日の呼吸を水の呼吸に変換することは可能なのだ。

「……とりあえず、目を覚ましたら鶴乃さんに伝えてください。

僕とは今まで通りの関係で……弟子になる以前の関係に戻ろうって」

「ありや、付き合わなくていいの?」

「唯華さん、僕には強くなるという目標があるんです。

鶴乃さんには申し訳ありませんが、僕は独身を貫くつもりです」

阿見莉愛はそれを見ていて、嫌な感覚を抱いた。

瀬宮の姿はまるで、嫌なことがあつたら練習に逃げようとするどこかの幼馴染そのものだった。

近いうちに大変なことになるであろうと、予感できた。

予感できなかったのは……その近いうちとやらが、今だということ。

「……やだよ。そんなのやだよ」

気絶していたはずの鶴乃が起き上がった。

だが、気迫がさつきとは大違いだった。

「おい、瀬宮」

「・・・なんですか、唯華さん」

「お前、あの子と知り合って何年くらいだ？」

「おそらく、彼女が物心ついたころにはとっくに」

「・・・第二の質問、お前イケメンだけど、前世から？」

「イケメンじゃないはずですが・・・まあ、前世と同じ顔ですね」

「そうかそうか、謙虚だな・・・それで、お前にだけ見せる表情とかつてあった？」

「えっ、ないと思いましたが・・・たまに生気のない表情になりますが・・・」

「・・・そういえば、僕以外の客にはあまり見せていませんでしたね」

「そこに、やちよが割り込んできた。」

「それ、あの子が一番安心しているときの表情よ」

「・・・瀬宮、責任取ろうか。お前、完全に主人公になってるよ」

「なんで??？」

彼女の持っていた扇子に纏っていた炎が桜色に変わる。

さらに、炎がさつきよりも自由自在になったかのようにだった。

「これがわたしの新しい神楽・・・コイガミ神楽だよ！ふんふん！」

このマジレコ世界における、恋の呼吸の誕生であった。

まさか、ヒノカミ神楽を持ち込んだことでこうなるとは。

唯華もこんなことばかりは予想できなかつた。

「てへぺろ」

「唯華さん・・・主体」

「ぎゃああああ」

瀬宮のとくに理由しかない攻撃によって、唯華は崩れ落ちた。

そして、新たな参戦者・・・！

「へえ・・・あなたのせいだったんデスネ？マサルが苦しんでいたのは・・・」

瀬宮、敗北

戦いはなんか熾烈を極めようとしていた！

「あなたみたいな人にマサルは渡さないデス・・・！」

「こつちだつて、負けないよ！ふんふん！」

だが、瀬宮は戦わずして、状況をなんとかしようとした。スタミナが少なくなつたからだ。

この期に及んで、彼はこの世界がマギレコだということを完全に理解していなかった。

話し合いで解決できるんだつたら、指定暴力団常盤組なんていらないうですよ。

「・・・アシュ」

「なんデスカ？」

「言つとくけど僕はアシュとも付き合いませんよ。」

だいたい、アシュは留学生じゃないですか

当然、いつか故国に帰る子に手を出すなんてしませんよ。

というか、アシュだつてそんなことのために留学しに来たわけじゃないだろ？

僕はアシユの父さんから、アシユのことを頼まれているんです。

だから、手を出すなんて無責任なことほしきませんよ。

いや、しちやいけないんです。どうか、わかってください。

死んだお父さんのことを思うんだしたら、考え直してください。

そもそも、僕以外にもいい男はいるんですから。

よく考えてください。男が何十億人いると思っっているんですか、え？

だいたい、そこでぐったりとしている唯華くんだっつていい男ですよ。

それなのに、アシユは短慮にもほどがありますよ。

鶴乃さん、今のは君にも言っていますからね？

僕と付き合って、結婚しても由比家を再興できる確率は低いですよ。

だったら、もっと一緒にのんびりとできる男性を探してくださいよ。

ぶっちゃけ、僕には強くなるという人生の目標があるんです。

それを恋愛だの淫夢だの有耶無耶にはしたくないんですよ。

わかりますか、いえ、わかってくれますよね？」

当然だが、わかってくれなかった。

気絶している唯華を除いて、誰もが冷たい目線を瀬宮に向けていた。

彼は女子を敵に回してしまったのだ。

「僕、何か間違ったこと言いましたか？」

間違ったことは言っていないのだ。

ただ、間違っていないということが問題だった。

彼の意見は理性的なのに対し、恋というのは感情の問題だからだ。

「……鶴乃さん」

「……うん」

「ここは同盟を結んだほうがいいです」

「そうだね」

一対二となつてしまった。

「僕は何も悪くないのに!？」

他の魔法少女から大ブーイングが浴びせられた。

「やっちまえ!二人とも!恋と淫夢を一緒にしやがった馬鹿を吹っ飛ばせ!」

都ひなのは二人を応援した。

ちなみに、令はこの様子を面白そうに撮影していた。

「いくよ、コイガミ神楽をくらえ!」

「こんなこともあろうかと、ういからツキカミ神楽を習つたのデス!」

さて、この小説の主人公であるはずの唯華は完全に意識を失っていた。

瀬宮はたった一人でこの状況を切り抜けないといけなかったのだ。

もはや自分を応援してくれる人は誰もいない。

まるで前世、正しく言えばへ一回目の転生の時のようだった。

「・・・ああ、最悪ですね」

彼は出し惜しみする気などなかった。

「統一・水軍式」

本来、統一は二人のテコンドー戦士がいないと不可能な技だ。

しかし、水軍式で二つの水流を生むことで、二人に対し同時攻撃が可能となる。

「コイガミ炎扇斬舞」

「ツキカミGlittering Gunk」

あつげなく無効化されてしまった。

とりあえず、専門家は後にこう解説している。

美樹さやか「どんな技だって、恋する乙女の前には無力なんだよ」

江利あいみ「悲しいけど、恋、戦争なのよね」

てなわけ、もはや瀬宮には打つ手などなかった。

逃げようとしても、他の魔法少女に取り押さえられるだろう。

事実、全員が武器を構えていたのだから。

彼は膝をついて、泣き出した。

「なんで……なんで皆、僕の邪魔ばかりするんですかあ……」

「いい加減になさい！」

彼は阿見莉愛にビンタされた。

「えっ……?」

「あなたは責任がどうか目標がどうか言つて、二人の恋路の邪魔をしたのよ！」

「あなたが邪魔をされても、文句を言う筋合いはありませんわ！」

「そ、そうはいつでも……というか理不尽ですよ、この展開!!」

「だいたい、見てられないですわ！」

そこでぐったりしてる男のように、

あなたはただ怖くて逃げているだけなのよ！

未来が怖くて、ただ逃げているだけ！」

「怖いに決まつてるじゃないですか???人生の墓場なんてごめんですよ???」

さて、ぐったりしている男こと唯華は知らない場所にいた。

自分の足が透けていることから、幽霊みたいになつてるのはわかった。

しかし、本当にここがどこかわからない。

どこかの小学校なのだが、あまりよくわからない。放課後なので人があまりいない。

まあ、手元にどういうわけか『帰還ボタン』があるので、いつでも自分の肉体に帰れそうさ。

おそらく、神様からの休暇なのかもしれない。

「・・・前世で通ってた小学校じゃないな」

彼の前世の小学校はもつと小さい学校で、廃校寸前だった。

しかし、なかなか廃校にならないほどしぶとかった。

こんな会話があつたくらいに。

「あの小学校、いつ廃校すると思う?」

「When pigs fly!!! (豚が空飛ぶくらいありえないな)」

さて、廊下を歩いていると女子児童に遭遇した。

ブルーブラックのロングヘアで、ネクタイとプリーツスカートという全体的に黒い服

装。

そして、ロケットペンダントをつけていた。

「・・・幽霊?」

「そうみたいだな・・・ここはどこだ?」

「赤ヶ瀬小学校よ。ここで死んだんじゃないの?」

「いや、俺はこうなる寸前まで神浜市という場所にいたはずだ。」

赤ヶ瀬小学校なんて神浜市にはなかったはずだけど？」

「・・・神浜市ってどこよ？」

「???'」

「???'」

とりあえず、一緒に話を整理した。

彼女によるとここは赤ヶ瀬小学校で、神浜市なんて日本にないらしい。

だが、唯華には確かに神浜市という場所にいた記憶があった。

そこで、彼はある質問をした。

「・・・魔法少女まどか☆マギカという作品は知っているか？」

「知らないわ、そんなファンタジー作品」

「なるほど・・・謎は全て解けた。」

「ここ、俺の世界とは別の・・・」

唯華は自分の発言に違和感を抱いた。

俺の世界？彼にとって、マギレコ世界はいつのまにか自分の家と等しくなっていたのだ。

「・・・俺のいた世界とは別世界だ。」

上手く説明はできないけど・・・別の宇宙からやってきたのかもしれない」

「パラレルワールドからやってきたってこと？」

「そういうことだな・・・帰還ボタンってそういうことかよ」

ボタンを押すと、肉体に帰るだけではなく、マギレコ世界に帰れるということでもあったのだ。

彼はボタンをもう一度確認することにした。

すると、ボタンの裏にこう書かれているのに今更気づいた。

瀬宮勝はこのままでは不幸になってしまいます。

そこで、たまたま仮死状態のあなたに頼みがあります。

どうか、彼に過去を乗り越えさせてください。

「・・・なるほど。しかし、瀬宮なんてお前知らないよな？」

「誰？」

「だよなあ・・・生まれ変わったら名前なんて変わるだろうし・・・」

いや、待てよ。顔は変わってないはずだ」

「・・・待って、心当たりがある」

彼女はロケットペンダントの蓋を開けた。

そこには、少し子供っぽい瀬宮と彼女が映っている写真が入っていた。

そこに映っている二人は幸せそうだった。

「おお、確かに瀬宮だ。へえ、前世からイケメンだったんだな」

「・・・智勇くん、生まれ変わったの？」

「まあな・・・なあ、瀬宮はこの世界ではどう生きてたんだ？」

「少なくとも、お前みたいな美人さんに未だに思われてるくらいには幸せだったんじゃないのか？」

「なんか前世で弱いからどうのこうのって本人は言ってたけど」

「・・・そんなことない。智勇くんは強かった。」

「確かに暴力とかいう意味だと、すっごく弱かったけど」

「唯華はツツコミたくなった。今の瀬宮は（危険な方の）テコンダーだからだ。」

「でも、常に勇気と知恵で戦ってた。」

「・・・たまに、何が起るのか知ってるようにも見えた」

「勇気と知恵・・・まあ、頭は良さそうだけど。」

「でも、死んじやつたのか？」

「・・・うん」

「そうか・・・何が起こったんだ？」

「話せば長くなるけど？」

「じゃあ、やめとく」

「そこは聞くべきじゃないの?」

「だってさあ・・・文字数は多くなるし、

そもそも、ここ原作世界じゃないし・・・。

そんな脱線、読者にとつてはつまらないだけだろ?

「だいたい、前回のときにお気に入りが増えなくて、作者落ち込んでるんだぞ」

「それは無計画にバトルもの始めた作者の自業自得じゃない。

「だいたい、読み返したら作者にとつてもつまらなかつたそうよ。

「・・・でも、そうね。確かに長くなるからね」

少女はペンダントを唯華に手渡した。

「いいのか? 大事な物なんじゃないか?」

「もう私には必要ないわ。昔のことだから」

「・・・過去を忘れられるって、羨ましいよ」

「忘れるんじゃないの。乗り越えていくのよ」

その瞬間、唯華は殴られてないのに殴られた気分だった。

「・・・大丈夫?」

「ああ、少し気が抜けてた・・・じゃあ、これ持つてくよ。」

今頃、あいつ一対二で苦戦してるだろうし、これが何かの役に立つかもしれない。

最後に、一つだけいいか？君の名前を教えてください」

「光本菜々芽」

「そうか・・・良い名前だな」

彼は帰還ボタンを押した。

目が覚めると、瀬本が鶴乃とアシユリーに対して意外と善戦していた。

ただ、周りの魔法少女たちは二人の方を応援していた。

「ようやく起きましたね、唯華さん」

「・・・おはよう、まなか」

「・・・ペンダントなんて持っていましたっけ？」

「うん・・・？ああ、そういうことか。」

気にしないでくれ。瀬宮を勝たせるための手段なんだ」

「えっ」

唯華は全力でペンダントを瀬宮に向かって投げ飛ばした。

「受け取れ、瀬宮！」

瀬宮はそれをキャッチして、蓋を開けて・・・

「ほ、ほく、こ、こんなのしりませ・・・ぐはっ」

吐血して倒れた。まさに、ななめ上の展開であった。

倒れた瀬宮は鶴乃とアシユリーに引きずられていった。

何をされるのか？ ナニをされるに決まってる。

「・・・俺、何かしちゃいました？」

全員が白い目で唯華を見ていた。

「えっ???

彼は良かれと思ってやったのだ。

そして、阿見莉愛に殴り飛ばされた。

初めての弟子？

分かること久しければ必ず合し、合すること久しければ必ず分かる。

中国の格言であるが、それはどこの世界でも当てはまる。

それは、魔法少女たちの世界にも……。

一第二のヒノカミ神楽っていうけど、名前変えた方がいいんじゃない？
——きっかけは本当に些細な事であった。

さて、ここで少し解説を。

魔法少女たちが戦闘に使う神楽はヒノカミ神楽が起源となっている。

ヒノカミ神楽を使えるのは……メタいことを言えば光属性の魔法少女たちだ。

しかし、火属性の魔法少女たちは別の神楽を舞うことができた。

それはヒノカミ神楽に似ているので第二のヒノカミ神楽と呼ばれることになった。

しかし、万年桜のウワサこと桜子はそれを疑問に思った。

ヒノカミ神楽は幽玄さが特徴であるが、第二のヒノカミ神楽は爽やかなのだ。

そういうわけで、その議論のせいで分裂しそうであった。

一方その頃……

「餃子が食べたかったからラーメンを出前で頼んだの!」

「それ注文の時に言ってくださいよ??」

「まあ、淫夢ジョークはいいとして、調子はどうだ?」

「そうですね・・・唯華さんを殴ったらすつきりすると思います。

毎朝すつきりしてるんですがね。あはは!」

「ハハッ」

「笑わないでください」

瀬宮は唯華を吹っ飛ばした。

「ひでぶ!・・・でも、前よりずっと強くなったな」

「ええ、守るものができましたからね。

以前の僕は、ずっと目的のない強さを求めてたんです。

でも、今は違う。今は、二人を守るための強さを求めています」

「・・・なあ、過去を忘れるのと乗り越えるのって、どんな違いがあるんだ?」

「難しいことを聞きますね・・・まあ、直視するかしないかの違いですよ。

過去を直視せずに忘れるのって、すごく楽なんですよ。

でも、直視したからこそ、本当の強さが手に入ったんですよね。

どうして、僕があそこまで強さを求めていたのかも思い出せたので」

「・・・そうか、そういうもんか」

ヒノカミこと唯華はそんなことも知らずに呑気に過ごしていた。

いや、呑気に過ごしていたというよりは、思索しがちになっていた。

さて、マギアユニオン内で微妙な揉め事になったが、外交関係も雲行きが怪しかった。

時女一族がだんだんとマギアユニオンに嫌悪感を抱くようになっていった。

理由は簡単。マギアユニオンが瀬宮のテコンドーを取り入れてしまったからだ。

「重根・旭日式ストラーダ・フトウーロ」

いろはがこんな技を繰り出してしまったのだ。

おかげで、結菜に全治三週間の大怪我を負わせることができたが。

「・・・なに、そのふざけた技？」

「えっ、そんなつもりじゃ・・・」

代償として、時女静香は完全にマギアユニオンを信頼しなくなった。

それでも、唯華の日常は平穏なものであった。

だって、彼は一般人なのだから。

しかし、非日常の魔の手は着々と彼に忍び寄っていた。

「・・・」

「やっぱりすごいっすねえ・・・」

ある日の夜、唯華は電波望遠鏡の方で神楽の練習をしていた。

あの野原は魔法少女たちで独占することが決まったのだ。

この前、瀬宮を吐血させた罰だそうさ。

「・・・見ていて楽しいか？」

「楽しいっすよ！すごくかっこいいっす！」

「・・・そうか」

彼はそのまま舞い続けた。

「さすがっすね・・・聖道唯華、〃神浜のダヴィンチ〃・・・」

「あまりその名で呼ばないでほしいんだが・・・」

「じゃあ・・・ヒノカミさん」

彼はピタッと止まった。

「・・・証拠ならたくさんあるっすよ。」

まず、アンタは小学生の時から神楽の練習をしていたっすよね？

でも、ヒノカミが動画を投稿したのはここ最近のことっす。

どうして小学生の時のアンタがヒノカミ神楽を知ってたっすか？

もう一つあるっす。それは、あの異常気象の日に、アンタの行方がわからなかったことっす。

「その代わり、ヒノカミが神浜市を救ったという噂が存在するっす」
「・・・だいが調べたようだな。」

でも、それだけだと話にならん」

「一番の証拠はアンタが動画よりも上手く踊ってることっす。」

投稿してからも練習を続けていれば、当時よりも上手いはずっすよ。

そもそも、ヒノカミ以上の実力がある時点で只者じゃないっす」

「・・・まいったな、何が目的だ？」

「ひかるの目的はただ一つっす。ヒノカミ神楽を教えて欲しいっす」

唯華はフリーズした。

「フリーズするなっす！」

「あべしっ」

「ピュエラケアの連中から聞いたっす。」

魔法少女のことをどういいうわけか知ってるって。

だから、神浜市の魔法少女がどういいう状況に置かれてるかはわかってるっすよね？」

「・・・リアルタイムで把握してるわけじゃねからな。」

まあ、なんか争ってるってのは知ってるけど」

「その争ってる勢力の一つが・・・ひかるの所属してた勢力が解散したっす」

話は結菜が大怪我を負った翌日に遡る。

「……来てくれてうれしいわ」

病室に義姉妹とその直属の魔法少女が集められた。

誰もが黙って俯くしかなかった。

(……すつごく重苦しい状況なの)

「今日が最後の姉妹会議よ。」

樹里、アオ、ひかる……。

あなたたちだけは残ってるわね。他の子たちは戦意喪失してしまってたわ。

神浜の魔法少女はあまりにも強くなりすぎた。

神楽だけじゃなく、劣等殲滅テコンドーまで取り入れやがったわ。

PROMISED BLOODは今日で解散よ。自由に余生を生きなさい。

長い間、復讐に付き合ってくれたことに……心から感謝するわ」

「顔を上げてくださいっす!」

「礼なんて必要ねえ!」

「今までわたしたちが戦えたのは姉さまのおかげなんだから!」

結菜は涙を流した。

「ありがとうっ……!」

そして、今に至る。

「他の子たちは皆、それぞれの道に進んで行ったつす。

アオさんの行方がどういうわけかわからないつすが。

問題はひかるつす。今まで、結菜さんに本気になってたつす。

でも、結菜さんにこれからは別のことに本気になれって言われたつす。

このままだと、ラクロス部にまた入れられてしまいそうつす」

「だから俺のところに来たってわけか」

「そういうことつす……」

「まあ、ご期待には添えないと思うけどな」

それでも、唯華は嬉しかった。

自分の神楽を正式に継承するかもしれない者が現れたからだ。

そういうわけで練習を始めたら……。

「あのさ、唯華くん……君も小学生のときは血反吐を吐いてたの忘れたのかい？

どうして初めてから数分の子に本格的に練習させたんだ？」

「すみません許してくださいい何でもしますんで」

ひかるは里見メディカルセンターに搬送された。

「……これつす！本気になれるものが見つかったつす！」

血反吐を吐いた当の本人は懲りていなかったようだが。

「あなたがひかるに血を吐かせたって・・・？」

「話せばわかる」

「問答無用よ」

唯華は空まで吹っ飛ばされて、星となった。

ぼんやりとした不安

最初は吐血騒ぎがあったが、ひかるもずいぶんと上達した。まず、基礎から練習させたのも大きい。

呼吸法をじっくりとやってから、舞の方に移ったのだ。

「いち、に、いち、に・・・」

「そこ、動きが少し違うぞ。集中」

「はいっすー！」

そもそも、唯華は呼吸の練習だけでも血反吐を吐いた。

その度に、阿見莉愛が泣きながらやめろといったものだ。

その時、ひかると目が合った。

その目に唯華は映っていなかった。ただ、太陽が映っていた。

(・・・俺より上手くなりそうだな)

(じつと見られると、恥ずかしいっす)

練習後、家に帰った唯華は次の練習の計画を練っていた。

彼はぼんやりとした不安に襲われていた。

文化侵略は順調に進んでいるではないか。

事実、最近投稿したMMDもウケまくっている。

それでも、何かの不安が彼を包んでいた。

・・・ひかるのことだろうか？

彼女は着々とヒノカミ神楽を体得しつつある。

この調子であれば、師弟関係の逆転もありうるだろう。

嫉妬しているのか？それも多少はあるだろう。

でも、それを言ったら美貌を持つ阿見莉愛にも嫉妬している。

人を導く能力のある和泉十七夜にも嫉妬している。

天才的な料理センスを持っている胡桃まなかにも嫉妬している。

誰よりも水名を愛している梢麻友にも嫉妬している。

多くのファンを集めている史乃沙優希にも嫉妬している。

花を愛していて、色々な花言葉に精通している春名このみにも嫉妬している。

可愛い女の子が二人もいて、その子たちを守り抜こうとする瀬宮にも嫉妬している。

いつの間にかヒノカミ神楽とは違う神楽を体得した秋野かえでも嫉妬している。

どういうわけかヒノカミ神楽を舞える千秋理子にも嫉妬している。

妹と強い絆を持ち、グループの中心であり、やはり神楽を舞える環いろはにも嫉妬し

ている。

自分より芸術センスのあるアリナ・グレイにも嫉妬している。

なんやかんやで一途にマンガに没頭できる御園かりんにも嫉妬している。

そして・・・一門の復興を託された常盤ななかにも嫉妬している。

・・・そういうわけで、“嫉妬”という感情で考えると、今頃すごい不安に襲われているはずなのだ。

嫉妬という線で考えるのはやめた。

これは誰かに相談する必要がある。阿見莉愛？彼女に弱い姿はどういうわけか見せたくないかった。

胡桃まなか？それだと阿見莉愛にバレてしまう。梢麻友？冗談じゃない、阿見莉愛に殴られる。

・・・ちょうどいいのがいた。

「私はカウンセラージャーじゃないんだけど？こんな朝っぱらから・・・」

「みたま、こちとら緊急事態なんだ。

こんな不安、今まで抱いたことないんだよ」

「・・・その不安を芸術に生かせば？」

「それもそうか」

彼女が適当なことと言ってはぐらかしたのに気づいたときには手遅れだった。すでに曲名のない曲をピアノで弾いてしまっていた。

いや、本当に曲名がないのだ。『界限』と知られる業界の曲だが、曲名がないのだ。こんなことをしても、不安を拭うことはできなかつた。

「……だ、大丈夫ですか？」

前みたいにはぐむが心配してくれていた。

「やっぱりいい曲じゃないよな……」

「そ、そういうわけじゃないんです！ただ……顔が不安そうで」

「だろうね……」

そこではぐむはポケットからあるものを取り出した。

それはヒノカミを模したフェルトのぬいぐるみだった。

「最近、お守りを作ってみました。」

一歩踏み出す勇気が出るようになって」

受け取ってみると、なんだか暖かった。

さつきまでポケットに入っていたからとかそんな理由ではない。

おそらく、本当に心をこめて作ったからこそ暖かいお守りになったのだろう。

自分で自分を模したお守りを持つのは何だかおかしな気分だったが。

それでも気持ちに落ち着きを取り戻すことができた。

「ありがとう、はぐむ。やつぱりこういう分野で君にはかなわないな」

「えっ・・・そんなことないよ!」

少し心が軽くなった気がする。

そうだ、こういうことはありふれてるじゃないか。

少なくとも、唯華は裁縫やら何やらははぐむと比べると苦手だ。

できることはできるが、誰が野獣先輩のぬいぐるみを欲しがるだろうか？

「・・・あんがと。少し落ち着いた」

「ど、どういたしまして・・・!」

今度は暖かい気分で同じ曲を弾くことができた。

そうだ。ひかるがどう成長しようとして、唯華が彼女に種を蒔いたことには変わらないのだ。

どちらにせよ、自分はそのままで大した人間ではないのだから。

「みたまは水名女学園に通えた!俺は絵を描けて、ピアノも弾けて、フルートも吹ける!

優勝トロフィーや賞状なんて飽きるくらいにたくさんもらった!賞金だって一生遊べるくらい!」

何も成したことがないお前らのようなミジンコが、みたまを非難する資格なんてない

んだよ！」

水名女学園から帰ってきたみたまを庇うために、こんなことを言い放ってしまった。でも、今となっては・・・どつちがミジンコだったのだろうか。

星の舞

ついにひかるが飛び立つ時が近づいていた。

彼女は虎屋町学園で神楽部を結成したらしい。

孫弟子ができたということでもある。それは素直に嬉しかった。

でも、少しずつ不安が強くなっていく。

それが何なのか、彼女が飛び立つ最後の最後まで気づかなかった。

ある日、ひかるは唯華にあるものを見せたいと言った。

「なんと・・・ひかる独自の神楽が完成したっす！」

「まじか」

彼女は神楽鈴を持って、静かに舞い始めた。

それは決してヒノカミ神楽から派生したような神楽ではなかった。

全集中という点ではヒノカミ神楽と同じだが、それ以外は違った。

いふなれば、ヒノカミ神楽から独立した神楽だった。

なんと煌びやかで、美しい動作だろうか。

唯華は彼女の背後に星を、幽玄に煌めく星々を見た。

独立した神楽どころではなかった。

彼女の神楽は、完全にヒノカミ神楽の上位存在であったのだ。

以前、彼女の瞳には太陽が宿っていた。今は星々が宿っていた。

これが不安の正体だったのだ。

ひかるが唯華の遠くに行ってしまうこと。それで彼が一人になってしまうこと。

「・・・おめでどう、俺が教えることはもうなくなっちゃった」

彼は涙を流しながら、彼女を祝った。

「男がめそめそと泣くなつす！」

ひかるにビンタされた。

「・・・ひかるは、いつまでも師匠の弟子つすよ」

彼女はこうして唯華が泣いていたのか察してくれたのだ。

彼は深く彼女に心の中で感謝した。

「ところで、名前はとうするんだ。その神楽の」

「そうつすね・・・ホシカミ神楽」

「師匠権限で“星の神楽”」

「良い響きつすね！でも、理不尽つす！」

「だって、俺いつまでも師匠だもん」

「ぐぬぬ・・・」

こうして星の神楽が誕生した。

ヒノカミ神楽よりはるかに優れたこの神楽はいずれ世界中に広まるだろう。

文化侵略は、色々な意味で成功といえる。

「ところで師匠、一緒に踊らないっすか？」

「おっ、そうだな」

それから二人は夜空をバックにそれぞれの神楽を舞い始めた。

太陽は星を消さないように、星は太陽より煌めかないように。

二人は互いを思いやりながら、神楽を舞った。

そうして時間は流れていった。

「・・・朝だな」

「・・・そうっすね」

ヒノカミ神楽はもともと一晩中舞うための神楽だ。

そういうわけで、いつの間にか朝になっても不思議ではないのだ。

「それじゃあ、またいつかつす」

「・・・ああ、またいつか」

唯華はひかるが見えなくなるまで、ずっと手を振って見送った。

最初に会った時、唯華は神楽鈴を投げ捨てていた。

しかし、今の彼はぎゅつとそれを掴んでいた。

ひかるに神楽を教えていた間、唯華の心が少しづつ変容していった。

そして、ついに覚悟ができた。色々な覚悟ができたのだ。

華道をやる覚悟、文学をやる覚悟、．．．過去を直視して乗り越える覚悟が。

華の心

最初に魔法少女の情勢について話をすることを許していただきたい。

PROMISED BLOODは解散に伴い、キモチの石をなんと時女一族に渡して
いた。

これは神浜の魔法少女たちに対する最後のささやかな抵抗であった。

一方、マギアユニオンはどうなっているかというところ。

いろは（光）「こつちがヒノカミ神楽に決まってるじゃないですか！」

ももこ（火）「何言ってるんだ？こつちがヒノカミ神楽だよ！」

桜子（光）「……」

令（火）「見ちゃだめだ、こんな醜い争い」

このザマである。まあ、仕方ないね。

広江ちはるはこの惨状を見て、マギアユニオンとの同盟解消を決心した。

しかし、他の神楽を使う魔法少女からしたらいい迷惑だった。

フェリシア（闇）「助けてくれよ、かこえもん。いろはが面倒くさいんだよ」

かえで（木）「ふゆう……かこえもんちゃん、助けてよお。ももこちゃんが……」

かこ（木）「私を未来のロボットだと思ってませんか??」

あまり迷惑を被らない魔法少女もいたが。

あち死（光）「神楽踊ろうとしたら体がフワフワ・・・なんでもう一人のあちしが倒れるの？」

このは（水）&葉月（光）「あやめー!?!」

神楽を踊らない、または踊れない魔法少女にとっては関係ない話だからだ。

ちなみに、あやめは里見メデイカルセンターに搬送されて助かった。

鶴乃（火）「あつ、わたしは引退してるから」

アシユリー（闇）「同じく」

とてつもない揉め事が起こっていた。

さて、そんなことはともかく、唯華は華道のために花を買いに来ていた。

「・・・雪でも降らせるつもりですか?」

「何言ってるんだ?とりあえず、ヤブデマリとエーデルワイス。」

あと、他にいくつか合うような花を持ってきてくれ」

「覚悟と高潔な勇氣・・・わかりました!」

花を買った後、じっくりとそれらを活けることにした。

一分が一時間のようにも感じられた。

苦痛だったから長く感じたわけではない。

ただ、落ち着いていたから無限の長さを感じていたのだ。

器と花に向き合うと同時に、自分にも向き合っていた。

一本、二本と切り取って、剣山に刺していく。

華心流にいたころの記憶が蘇ってくる。

あの頃、唯華は師匠に対して一番忠実な弟子であった。

華心流の伝統を引き継いでいこうと思っていた。

ななかと一緒に花を活けるのは、楽しかった。

魔女が何かやらかしたような気がしたが、転生者だからか唯華は影響を受けなかった。

それでも、一般人である高弟たちは次々と独立していつてしまった。

必死に唯華が引き留めようとするも、無駄であった。

彼らに声は届かなかった。いや、聞こうともしなかつた。

それで唯華の自信がぐらついた。転生者なのに、何もできなかつたのだから。

それでも、希望は捨てていなかった。まだ、唯華は華心流に残っていたのだから。

だが、理由不明の破門によって華道に関しては何もを失ってしまった。

今思うと、高弟たちの様子はどこかおかしかった。

彼らが唯華の引き留めに応じなかったのは、魔女の影響だけではなかった。彼らは以前から唯華を嫌っていたようにも思えた。

「・・・」

ふと、嫌な考えに行き着いた。

遅かれ早かれ、華心流はいずれ崩壊したのではないのかと。

そして、その原因は唯華にあるのではないのかと。

「・・・」

思えば、師匠の唯華を見る瞳はどこか嬉しそうで、そして悲しそうでもあった。

弟子を持った唯華には、今になって理解できた。

師匠は唯華が新しい流派を生み出すことを予見していたのかもしれない。

ひかるが星の神楽を生み出したように。

だが、その生みの苦しみに華心流が耐えられる保証はなかった。

そのタイミングで、魔女の影響により華心流は混乱に陥った。

そんな華心流の中から新しい流派が生まれたら、どうなるかわかったものではない。

そこで師匠は唯華を破門とすることで、華心流の存続を図ったのかもしれない。

「・・・俺にはそんなこと大層な事できないのに」

彼は華心流に戻りたかった。

新しい流派を生むだなんて、そんなことできやしないと思った。戻りたい。でも、戻れないのだ。

そんな時、インターホンの音が鳴り響いた。

玄関まで行ってドアを開けると、そこにはななかが立っていた。

「唯華さん……このみさんから聞きました。

また華道を始めたそうですね」

「さつそく聞きつけたか……多分、腕は落ちてると思うぞ」

「……見せてください」

ななかを家にながらせ、活けてる途中のものを見せた。

「……こつそり練習してました？」

「何を言うんだ。ずっと中断してたんだぞ？」

「それでも腕は衰えていないようです。

それに……以前よりもさらに静寂が現れています」

「……そうか」

唯華はコーヒーを淹れた。

「あら、緑茶は飲まなくなつたんですか？」

「まあな……苦さが気に入つたというか。」

「……少し、話をしていいか？」

「……ええ、どうぞ」

一口啜って、話を始める。

「俺、最近弟子をとったんだ。」

最初は俺の指導ミスとかもあつたけど、段々と上達していったんだ。

そしたら、俺を完全に上回っちゃったんだよ。

それも完全に独自のものを創り上げるくらいにな。

未だにアイツが俺を師匠として認めてくれているのがありがたいだ」

「……」

「これは俺のうぬぼれかもしれないけどさ、師匠が俺を破門したのも同じ理由なのか？」

「……その通りです」

花の香りとコーヒーの香りが混ざり合う。

「……父はあなたの才能を認めていました。」

その才能で華心流を昇華させた新しい流派を創り上げるだろうということも知って
ました。

でも、それで華心流が消えることは望まなかつたのです」

「なるほどな……でも、いざという時はお前を頼むとも言つてたけど？」

「それは・・・私の華心流とあなたの新しい流派でお互いに助け合えということですが、今は乱れているものの、華心流には伝統があります。」

ですが、あなたがいずれ創り上げる流派には伝統がないのです。

・・・華心流の流れを汲んだ流派であることを証明すれば、話は別ですが」

「そりやそうだな」

唯華はだんだんと師匠の意図が読めてきた。

「・・・つまり、俺の流派が伝統ある華心流の流れを汲んでいることをなかなか証明して、その一方で俺は華心流が再び乱れそうになった時に外部からなかなか助けられればいい」と

「そういうことですよ、唯華さん」

唯華はひかると舞った夜のことを思い出した。

太陽は星を消さないように、星は太陽より煌めかないように。

師匠は二つの流派がそうして助け合う未来を望んだのだ。

「・・・日鏡流」

「えっ？」

「あなたの流派の名前ですよ。」

唯華さんの燃えるような心の静寂を体現したような作品にはびったりですから。

今はまだ宗家を設立するには技量不足ですが、そう遠い未来ではないでしょう」
「・・・ありがとう、ななか」

「それはそうと、小学生のかこさんの絵を海外に展示したのは許しませんから」
ななかの理由しかない膝蹴りが唯華を襲う！

その後、彼女に見守られながら作品を完成させた。

もう華心流には戻れない。しかし、戻るつもりはもうなかった。

こうなったら覚悟を決めて、いざれ新しい宗家を設立するしかない。

そして、高潔な勇気をもって、華心流を助けていくのだ。

こうして一つの過去を乗り越えることができた。

いろは、襲来

ある日、電話がかかってきた。

まなかからであった。

「唯華さん、実はかくかくしかじか」

「えっ、どっちが正統なヒノカミ神楽か争ってるって？」

「そうなんです・・・それで、正統な神楽なのか教えて欲しくて」

魔法少女たちがそんなことで争っているとは思わなかった。

「あ　ほ　く　さ・・・俺の弟子を見習えっつての、いろはの奴・・・」

「えっ、ちよっ、待つてくだ・・・」

唯華は色々がっかりしたのだ。

弟子のひかるは星の神楽を創造するほど成長したというのに、

未だにいろははヒノカミ神楽から踏み出せていないのだ。

「教えてくれたっていいじゃないですか！」

まなかガラスを割って入ってきた。

そのせいで、植木鉢も割れてしまった。

「見ろよこれえ。なあ、この無残な姿よオ」

「まなか、わるくないです」

冗談はさておいて……

「その……第二のいな……ヒノカミ神楽はこの前見たけどさ」

「ちなみに、まなかも踊れますよ」

「マジか……でも、それヒノカミ神楽じゃねえんだよな」

「そうなんですか？」

彼はついに秘密の一端を打ち明けることにした。

「ヒノカミって漢字にすると何になると思う？」

「燃える方の“火の神”なんじゃないんですか？」

「実はそうじゃないんだ。太陽の神様なんだ。」

これを知ってるのは俺と阿見莉愛だけだな」

彼は紙切れに“日の神”と書いた。

「なるほど……そうなると、第二のヒノカミ神楽って……」

「どちらかというと、炎の方に近いんだ。」

炎の神……エンガミ神楽と名乗った方がいいんじゃないか？」

「なるほどなるほど……ありがとうございます。」

それはそうと、さっきの電話に関して残念なお知らせが
「なんだ？」

「あれ、いろはさんが聞こえるように通知音量MAXにしてたんです。

ヒノカミとしての唯華さんの意見を聞きたがっていましたから。

今、やちよさんが宥めてますが、時間の問題ですね」

「ほうほう・・・じゃあ、俺はこれで失礼する」

ところが、時すでに遅し。玄関のドアが吹っ飛ばされる音が聞こえた。

「・・・はは、玄関から入ってくるだけ、お前よりマシかもな」

「そんな冗談言ってる場合ですか???まさかこんなに早く来るなんて・・・!」

彼はまなかを左手で抱きかかえて、本棚を動かした。

そこには、ドアが隠されていた。

「唯華さんはこのアンネですか？」

「こんなこともあるうかと、つてな」

本当は小さい頃の阿見莉愛と一緒にいままごとをしていた部屋なのだが。

隠し部屋に隠れた数秒後に、さっきまで唯華たちがいた部屋のドアが吹っ飛ばされた。
た。

「・・・唯華さん、弟子ってどういうことですか？」

私には教えてくれなかったのに、どうして他の人には教えたんですか？私にやっぱり才能がないからですか？ねえ、どこに隠れてるんですか？

怒ってるわけじゃないんですよ・・・確かに、少しでもイライラしてますが。

早く出てきてください、弟子が誰なのか教えて欲しいだけなんですよ。

別に弟子に何かするわけじゃないですよ・・・私より資格があるのか確かめたいだけです」

唯華とまなかはがくがくと震えた。

(イライラなんてレベルじゃない・・・！)

だが、その瞬間、彼は前世から伝わる究極の格言を思い出した。

「・・・攻撃は最大の防御」

「唯華さん?!?とち狂ったんですか?!?」

彼はおままごと用の玩具包丁を手にした。

「まなか、お前はそこの窓から逃げるんだ」

「わかりました。急いで阿見莉愛さんたちを呼んできますね。

・・・絶対に生きていてください。死んだら承知しませんから。

でも、少しツッコませてください。どうやって勝つつもりなんですか?!?」

戦いの結果、唯華は両目を失明し、いろはは両足が不随となった。

阿見莉愛たちが駆けつけた時には、両者ともに戦闘不能となっていたのだ。
院長「まあ、私が治すからノープロブレム」

里見メディカルセンターの医学は世界一イイイイー！

「薬学の方は俺が世界一なんだけどな・・・目が見えねえ」

「・・・ばか」

唯華のそばには、ずっと阿見莉愛が付き添っていた。

「目が見えなくても、阿見莉愛がいるから安心できるよ。」

「ごめんな、こんなことになってしまった」

「これに懲りたら、二度と魔法少女と戦わないことね・・・。」

そもそも、どうして玩具包丁で相手を戦闘不能にしたのよ???

・・・ほら、お口開けなさい。大番（愛媛県宇和島の名物）買ってきたから。」

「ありがと・・・」

その時、ドアが開けられる音がした。

「・・・かこ、か」

「よくわかりましたね」

「雰囲気だな」

ちなみに、結菜とかりんも同じ病室である。

(・・・安穩が欲しいの)

(さすがは“神浜のダヴィンチ”、気配で見分けれるだなんてね・・・)

目が見えなくなつたことで、唯華は物思いに耽る時間がさらに増えた。物思い、と言つても取り留めのないようなことばかりだったが。

すると、それを何かに書き留めたくなつてきた。

「・・・阿見莉愛」

「何ですか?」

「原稿用紙持つてきて」

「両腕折るわよ」

「びえん」

「まずは休みなさい」

阿見莉愛の言う通りだった。

ここ最近、唯華はゆっくり休んだ覚えもなかったのだ。

這いよる暗闇

「・・・ふうん、ずいぶんと名前が売れてるんだね。」

さすがは王道唯史くん。いや、今の人生では聖道唯華くんか」

青髪の青年がくすつと笑うが、その目は笑ってなかった。

「さて、TDNくん。さっそく嫌がらせしに行つておいで」

「人生返してください、オナシヤス」

「あはは・・・！唯華くん、どんな表情するかなあ・・・！

ガイドラインに張り付けたせいで、クラスメイトがホモレイプされたと知つたら・・・！」

それから数時間後・・・。

大東学園男子生徒A「いやー、まさかTDNが学校に襲撃するとは思わなかったよ」

「お、おい、大丈夫だったのか？」

唯華は危うくミカンをのどに詰まらせるところだった。

B「俺たち三人で何とか撃退した」

C「三人に勝てるわけないだろ」

「ですよねー」

淫夢が進出した世界において、三人相手には勝てなくなつたのだ。

これは世界の絶対的な規律となり、国連憲章でも認められた。

唯華の蒔いた種が世界中に根を張つたのだ。

「それにしても、どうして大東なんかに．．．あつ（察し）」

唯華は冷や汗をかいた。身に覚えがありすぎる。

T D Nは球団をクビになつたのだ。

復讐しに来たつておかしくはない。

しかし、どうやって唯華だとわかつたのか？

いや、やっぱりただ劣情に身を任せた行動だつたのか？

A 「それにしても、目は大丈夫なのか？」

「大丈夫だ問題ない」

B 「それ大丈夫じゃないやん」

「まあ、目が見えなくても阿見莉愛がいるからな」

C 「うわ、依存しまくり」

「それよりも気になるのは．．．どうして俺みたいなのに構つてくれるんだ。

お前ら、以前結構ひどい事言つてたような気がするんだけど？」

それはみたまが帰ってきたときの事。

唯華だけがみたまを庇い、ある言葉を言い放ってしまったのだ。

「何も成したことがないお前らのようなミジンコが、みたまを非難する資格なんてないんだよ！」

それに対するABCの三人の答えは・・・。

A 「うっわ、ドン引きだわ」

B 「さすが天才は言うことが違いますねー・・・死ねよ」

C 「俺たちのこと見下してたんだな。最低の屑だな」

こうしてクラスどころか学校全体から孤立してしまったのだ。

いじめられてないだけ、まだマシだった。

A 「あー、思い出したら、ちよっとイラっとした。ヨツンヴァインになれよ」

B 「(黒歴史を思い出すの) やめたくなりますよ」

C 「当時は若く・・・」

「・・・まあ、(俺も若かったから) 多少はね」

今はそんな過去を乗り越えて、彼らは和気あいあいとしていた。

「わけがわからないの」

「これが語録の力よ・・・」

かりんはホモビを知らないから語録の力を知らないが、結菜は知ってしまったので復讐心がそがれてしまったのだ。

淫夢語録は人を優しくするって、はっきりわかんだね。

(・・・そうだ、あの曲をそろそろ発表するか)

そのころ中央区で青髪の青年とTDNが合流していた。

「センセンシャル」

「いいよ、三人には勝てないのは常識になってしまったから。

まったく、忌々しいよ。彼は世界のルールすら書き換えてしまった。

でも、三人には三人で挑めば実質的に一対一さ」

青年が指を鳴らす。すると、遠野が現れた。

「淫夢ファミリーが揃ってくれているのはありがたいね」

「あなたに付いていけば、もう一度先輩に会えるんですか？」

青年はくすつと笑って答えた。

「そうだよ。さあ、そろそろ来るはずだよ。

さつそく唯華に最初の絶望を味合わせてあげよう。

転生しても、前世の業からは逃れられないのさ」

A、B、Cがホモレイプされたという報せを聞いたのは次の日のことだった。